

# 第1分散会

ファシリテーター 西川 浩司  
分散会記録者 山本 葵子

## NPO 法人まちの食農教育～食農教育活動～

NPO 法人まちの食農教育 発表者 樋口 明日香

徳島県神山町「まちを将来世代につなぐプロジェクト」の一環として2016年に株式会社フードハブ・プロジェクトを設立した。「農業を次世代につなぐ」を合言葉に、農業者の育成を行っている。2017年には地域の農産物が食べられる食堂「かま屋」や「かまパン&ストア」を設立した。神山の材で机や椅子、箸などを製作したり、食文化と郷土料理(味、種)を伝える活動を行ったりしている。また、加工場の運営、地域の子供たちへの食農教育に進め、農業と食文化の地域内循環エコシステム「地産地食」に取り組んでいる。さらに、後継者を育てるために、農業研修制度を設け、社会的農業を実践している。

6年間、幅広い年代の子供たちに農体験を提供してきた。町で唯一の高校である城西高校神山校(農業高校)では、神山創造学の授業やまめのくぼプロジェクトに取り組み、2022年にはNPOとして食農教育部門が独立した。これまで進めてきた町ぐるみの農体験を背景に、今後は小・中学校の食農教育の充実に努め、学校食というあたらしい概念を作っている。

かま屋  
かまパン  
&ストア



2017年3月OPEN

広野・神領小5年生  
もち米の栽培  
ファームティーチャー:白根茂さん・薫さん



## 西予市教育員会 田之筋公民館

西予市教育委員会 発表者 上甲 啓一郎

田之筋公民館は、愛媛県下はもとより全国でも独立公民館の先駆けとなった公民館(昭和22年4月に完成)である。戦後の混乱期の中で独立公民館運営を敢然と行った地域住民お社会教育に対する情熱は、今も脈々と後世に受け継がれている。



田之筋地区では、地域(地域づくり協議会)、公民館、学校が連携して子どもを核とした活動を積極的に展開しており、放課後や長期休業中に一緒に宿題や体験活動等を行う放課後(休日)子供教室、花植えや登山等を行う緑の少年団活動、トランポリン・スポーツライミング教室、交流人口及び関係人口増加や子どもたちが心待ちにする場づくりを目的とした「たのすじマルシェ」等をおこなっている。

田之筋地区には地元の大人たちによる子どもたちへの支援が確立されているという「子どもたちのための地域づくり」がDNAとして継承されている。

このような取り組みは、すぐに目に見える成果は出ないものの、継続的な活動を通して地域に対する愛情・愛着を高めることができれば、定住・Uターン人口の増加につながると思うし、当地区については、人口減少が著しい昨今の状況下において、10年前、現在、10年先を比べても人口(児童生徒数)も横ばいである。これは、いままでの取り組みの成果ではないかと考えている。

今後は、子どもに企画段階から参画してもらい、女性の関わりを増やすなどして、もっと地域を巻き込んでいきたいと考えている。



## 【質疑応答】

< NPO 法人まちの食農教育 >

Q 今後、直近で関わっていききたいようなプログラムとか構想はあるか？

A 関心のある子供たちが参加しやすい学校外のプログラムを展開していきたい。異学年の集団や学校に行きづらい子供が参加できるプログラムは、設計の仕様によって可能である。また、「神山まるごと高専」が今後大きな動きをしていく。カリキュラムの中では5年生前期で「食農ワークショップ演習」の授業で関わることになる。授業だと限定的な関わりになるが、寮で暮らしながら学ぶ子供たちに対して、暮らしの一部としての食農のあり方を学ぶ体験を意図的に組み、コーディネーターとして子供たちが興味を持ったところで掘り下げていく流れを作っていきたい。

Q 「かま屋」の食堂のメニューでは、栄養バランスをどのように考えているのか。

A 採れた野菜からメニューを組んでいるので、食堂において「地産地消」の流れはできている(メンバーの中に管理栄養士はいる)。学校給食では規模や管理体制が厳しく、食堂のような取り組みができていないけれど、「まちぐるみの地産地食」を考えていく流れを、栄養教諭や町の教育委員会と協力しながら作っていく。学校給食をどう考えていくか、どう進めたいか、地産の物をどう取り入れて栄養や衛生面も含めたメニューを構成していくか、地域内経済循環をどう高めていくか、学校給食を柱にした希望のある展開を構想していきたい。また、食堂でやっている「地産地食」の取組が良い見本となるといいなと思っている

Q 活動する中で補助金や収益などで苦労したことはあるのか。また、収益が上がった経験があれば教えてほしい。

A 町が教育予算を付けている。心強くて有難いことの一つである。「フードハブ・プロジェクト」の当初2年間は手持ちの資金で教育活動を行っていたが、小学校全学年を対象としたときに人件費分を委託事業として受けるという流れでお願いし、付けてもらった。2018年からは、一定の金額の人件費分、町の小中学校、県の高校に関わる場合は予算が付いているので、維持できている。加えて、ふるさと納税の仕組みから使い道の一つとして町ぐるみの食農教育を設けた。そこへの寄付金が見えるシステムを作っている。資金作りでは苦労している。NPOとして社食と連携しながら少額の寄付で大勢の人から集められる寄付の仕組みをどう作れるかをメンバーと話している。

<西予市教育委員会 田之筋公民館>

Q 人口の緩やかな変化は転入以外の要因はあるのか。

A 家業の後継ぎや大規模校から小規模校で子供のケアをするなどゆっくり子育てをしたい方がいることが考えられる。

Q 家業の仕事があるということか。

A 田んぼや畑仕事とは別に他の場所で仕事をするベッタウンとして機能しているので、人口の増減はないと思う。

Q 子供たちに体験から学んでもらうための工夫や意識していることは何かあるのか。

A 教えすぎないことである。危険なことから学びは大きいので、過干渉にならず我慢して見守ることも大事なことである。そのためには、スタッフ間での情報共有を密にしておくことや、最悪な状況下でのケアを考えておく、備えが大事だと考えている。安全な行動だけでは学びは少ないので、その機会を多く与えたい。

Q 人的ネットワーク作りで上手くいったことや、地域を巻き込んでイベントを盛り上げるコツはあるか。

A 人的ネットワークづくりのコツは、業務外の活動にどんどん飛び出すこと、好奇心をもっているなことに挑戦すること、人に興味を持つことだと思う。地域を巻き込むコツは、無理しないことである。分かりやすく青写真を描き、ゴールを共有することが大事である。地域の人に目指していることをいかに具体的に熱量をもって説明できるかと、小さな成功体験を積み重ねを見える化(SNS等での反響や数値等)することで意識は変化していくと思う。

Q 活動する中で補助金や収益などで苦労したことはあるのか。また、収益が上がった経験があれば教えてほしい。

A 子ども教室などについては、行政主導の場合、内外の様々な軋轢があって利用者の求めるような制度設計ができないことが多々あると思う。社会教育主事をしていた頃に、子ども教室を推進する立場であったが、空き教室問題や施設管理の観点から学校側の理解を得られず、受け入れてもらえなかった。当地区の場合は、地区の方が保護者ニーズをくみ取り、教育委員会と粘り強く折衝し、教育長に直談判したことで学校側の理解や予算が付いた経緯がある。熱意を持って住民が動くことで、局面は大きく変わり、田之筋地区独自の特色のある活動ができている。西予市の場合、各校区に地域づくり組織が組成されており、地域の実情に応じたそれぞれ違う課題に対して自由に使うことができる交付金がある。り、マルシェについては、0予算で仕組みを作り、出来る範囲で実施した。SNS等でなるべく人を呼び込む仕組みと出店者完結型の仕組みを作った。

大がかりなことをして地域の役員に準備等で大きな負担がかからないよう工夫した。収益金は、地域づくりで地域のために使うお金としてストックしている。

### <全体を通しての意見感想等>

自分自身が地域を良くしたいという漠然とした思いがあった。同じ思いを持った人がいて、うれしかった。

- 学校現場でも地域との繋がりはあるが正直難しいので、食堂で、椅子や箸、机などを地域の業者との連携は苦労していると思う。地域との関係が崩れてはいけないし、大変だったと思う。また、地元の人材を活用する点では、子供を元気にさせようとしている人たちを巻き込んで、その人たちも元気になるところが勉強になった。地域との繋がりではネットワーク作りも大変だったと思う。今後は自分も少しずつやってみたい。
- 双方の話が似ているようで似ていないという印象であった。行政と民間の違いがあるが、実際どう予算を付けるかなど、それぞれのハードルがある。自分も民間の立場であるが、食べ物よりも必要ではないかもしれないと扱いがあり、厳しい。松山市が俳句の町なので、スポンサーを付けて愛媛県の小学1年生向けの教材を配布した。先生方が俳句を教えたいけど教えにくい、教案が無い、無理やり短冊だけ配って作らせるという悪行が多いので、改善するために行った。マーケットが小学1年生ということで、それに伴うスポンサーを付けた。行政と民間ではやり方が違うという印象である。行政はお金がゼロではないが、民間は持ち出しなので苦しさを一緒に連携しないと育まないと思う。

# 第2分散会

ファシリテーター 山中 健司  
分散会記録者 西村 隆信

## ～キャリア教育プログラム「シラタマ活動」、「青少年講座」 牟岐中学校での平和学習～

特定非営利活動法人ひとつむぎ 発表者 岸 壮真

「ひとつむぎ」は、人と人をつむぐことから生まれる教育やまちづくりを目指した団体である。拠点としている徳島県牟岐町は、人口減少が続いており、高校がないため、子どもたちは中学を卒業後、町外に出て行く。また、南海トラフ地震による津波被害が心配されている町である。

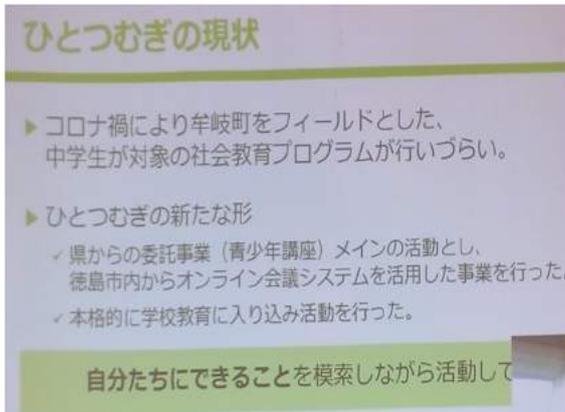
本団体の2022年度の主要活動は、シラタマ活動、青少年講座、平和学習の三つである。

シラタマ活動とは、地域の課題解決をするための企画を立て、実際に実現させていくためのプロセスを経験する中で、中学生の主体性や協調性、コミュニケーション能力、郷土愛を育むための活動だ。「ひとつむぎ」は中学生に伴走し、地域の方々と協働しながら活動を行ってきた。

青少年講座では、15～25歳の若者を対象として、将来の不安や身近な社会的課題を、多彩なゲストを招き、対話を交えたワーク等を行い、共に考えている。これまでは対面形式で行ってきたが、今年の8月はオンラインで開催した。

また、昨年度から牟岐中学校の2年生を対象にした平和学習の授業を行った。牟岐中学校は例年、沖縄に修学旅行に行っていたが、新型コロナウイルス感染症の影響で、沖縄に行くことができなくなったため、実施するようになった。今年度は「ひとつむぎ」が広島に行って、平和記念公園で現地の語り部の方から話を聞くなどの取材を行い、その内容を大学生が咀嚼し、感じたことを含め中学生に伝えた。

現在、新型コロナウイルス感染症の影響で、学生を対象とした社会教育プログラムを行い難くなっている。活動の主となるシラタマ活動は今年度も中止となった。大変難しい状況ではあるが、自分たちにできることを模索しながらこれからも活動していきたい。



## ～野村地域「地域教育プロデューサー」の活動～

野村地域自治振興協議会 発表者 染田 麻弓子

野村地域自治振興協議会では、地域教育の推進を目的にキャリア教育ミッションでの地域おこし協力隊を採用している。地域おこし協力隊は、全国で1,085団体、6,000人おり、その自治体ごとに求められた観光・広報・農業・移住推進など様々なミッションに取り組んでいる。野村地域でのミッションは教育系ミッションである。

令和3年7月に着任し、まずは、関係づくりをするために、関係団体や小学校、中学校、高校へあいさつまわりをしたがあまり手ごたえがなかった。また、新型コロナウイルス感染症が拡大する中で繋がるきっかけも少なかった。しかし、「野村＝のむむら（飲む村）」という地域柄もあり、少人数での歓迎会等を通して、つながりが段々と広がっていった。

現在の主な活動は、放課後子ども教室のコーディネーター・講師、小学校クラブ活動への参加、野村地域自治振興協議会地域づくり活動への参加、中学校総合学習復興プロジェクトコーディネート、職場体験サポート、のむらーにんぐ等である。

特に中学校での活動が多い。それは、管理職と何度も話し合いを行うことで、活動への理解を深めてもらい、様々な活動に取り組むことができています。

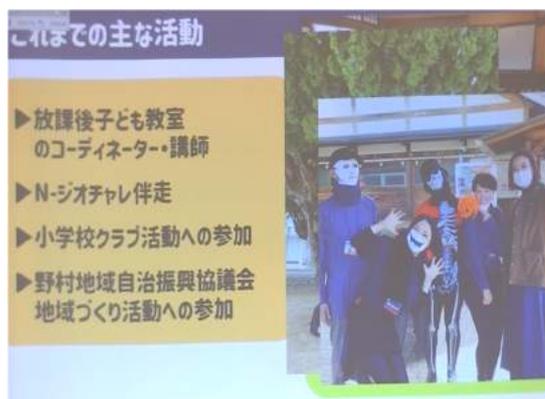
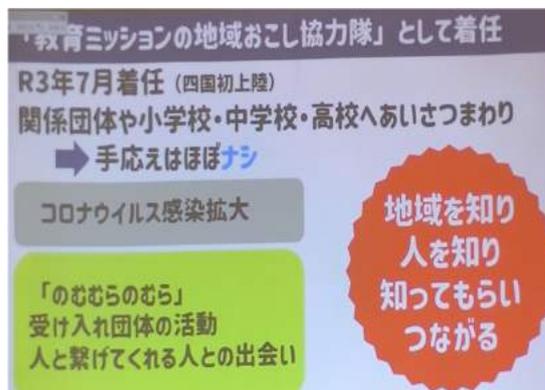
「中学校総合学習復興プロジェクト」は、総合的な学習の時間を主として、中学校全体で取り組む活動である。中学生自らが活動内容を企画し、実行している。学習の際には、プレスリリースをして報道してもらうことで、多くの方が活動に参加していただいている。

その結果、中学生もよりやる気になり、保護者や地域の方に知ってもらうことができた。今年度は、生徒総会で8つのプロジェクトが起案され、目標に向かって取り組んでいる。

野村高校では、探究プロジェクトとして、乙亥大相撲盛り上げ隊を結成し、乙亥大相撲を盛り上げるために、SNS等を利用した活動に取り組んだ。期末考査等と期間が重なったことで、難しいこともあった。

「のむらーにんぐ」とは、子どもたちが高い教育に出会うための取り組みである。大阪大学等の学生に自分の興味のあることを話してもらったり、子どもたちに体験の場を用意したりしている。新型コロナウイルス感染症の影響で参加者が少ないこともあるが、実施したことをSNS等で公開して、活動を広げる工夫をした。

取り組む中で感じたことは、よそ者が知らない地域に入って活動するための一番の近道は、自分から学校に協力することで、徐々に理解してもらうことである。また、学校の先生は忙しいため、負担を増やすのではなく、協力するというスタンスがとても大切である。そうすることで、様々な先生と信頼関係を築き、活動の幅を広げていくことができる。



また、中学校の職場体験をコーディネートする活動で、職場体験受け入れ先を探す際には、企業に「学校の依頼を受けている」と話すと、地域から好意的に受け入れていただき、信頼されやすかった。地域の中の学校ということをすごく感じる事ができた。

この地域教育プロデューサーを務めるにあたり、自分に問い直していることは、「政治的・宗教的に中立であるか」、「時事を把握して公平に捉えているか」、「新しい知識や知見を広める努力をしているか」、「子どもたちにきちんと向き合っているか」、「地域に愛着をもって過ごしているか」、「学校や地域の負担になっていないか」、「地域と子どもの利益になっているか」である。

これからも、地域を大好きになるのが第一歩をモットーに、コーディネートだけでなくプロデューサーとして地域教育を考えていきたい。

## 【質疑応答】

< 特定非営利活動法人ひとつむぎ >

Q 大学生がひとつむぎに入るきっかけは。

A 2014年にHLABという団体が、牟岐町でサマースクールを行った際、ボランティアスタッフが地域の方にお世話になった。その牟岐町に恩返しをしたいという思いからできたのが、「ひとつむぎ」。現在は、そこでシラタマ活動等を実際に経験した当時の中高生が大学生になり「ひとつむぎ」で活動している。

Q 現在、牟岐町には学生は何人いるのか。

A 学校は、小学校、中学校が1校ずつあり、1学年20人前後。

Q 大学生はどのように牟岐町に来るのか。

A 車を持っている大学生が多く、車で移動している。車を持っていないメンバーは乗り合わせて移動している。

Q シラタマ活動の1年の流れはどのようになっているのか。

A 元々は、5月にチームを立ち上げ、準備を進め、8月後半にその成果を「むぎいろフェスティバル」というイベントを行って、地域の方に発表するようにしていた。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、活動が難しくなっている。今年は8月に集中的に5日間で行う予定にしていたが、中止した。

Q 新型コロナウイルス感染症の影響で、実施できるかどうか分からない状況での活動はモチベーションが下がると思うが、どうやって、モチベーションを保ったのか。

A 学生のモチベーション低下はあったと思う。できない活動もあるが、実施することができる活動もある。担当している活動以外の活動を手伝う等して、モチベーションを保とうとした。しかし、シラタマ活動をしたいという思いで「ひとつむぎ」に入ってきたスタッフもあり、モチベーションは保てなかったように思う。コロナ禍では、田舎に街から大学生が来るということはあまり歓迎されていない。「ひとつむぎ」のメインはシラタマ活動であるため、それができないのはしんどかった。この3年間、シラタマ活動をきちんとできたことはなく、縮小版しか行えていない。

Q 「ひとつむぎ」は教育学部の方が多いのか？また、何に魅力を感じて集まったのか。

A 学部はバラバラ。過去の例を含めても「教育学」「経済学」「国際言語学」「社会学」「情報工学」「医学」「看護学」など様々であった。

最近の例でいうと、シラタマ活動を経験してきた学生が友達を引っ張って来たり、中学生高校生にシラタマ活動をしてきたメンバーが大学生になり、そのまま入って来たりしている。

Q 岸さんがひとつむぎに入ったのはなぜか。

A 大学生生活に物足りなさを感じ、新たなことを始めたいと思っていたからだ。

Q 活動頻度はどれくらいか。

A 全体ミーティングはオンラインで週1回実施している。そのほかは事業ごとに不定期でミーティング、当日の運営を行っている。担当する事業以外でも、当日のイベントの運営を手伝うこともある。

Q 中学生が地域の人と関わる中で、地域側の問題はありますか。

A 長期間活動を行っていると、地域の方が段取り上手になり、子どもが考える場をなくしてしまうことがある。また、子どもやまたその家族等をよく知っているために、良くも悪くもラベリングしてしまう。

Q 活動を通しての中学生の成長を教えてください。

A シラタマ活動を経験する中で、なかなか話すことができない子が自分から話しかけることができるようになった。

A 学校とは別の活動であり、評価軸があるため、学校とは違う一面が見える。

感 大学生の団体の問題として、忙しくて集まれないことが多く、団員はいても、活動するメンバーは、固定化されることが多い。

感 学生の優先順位の問題で、団体での活動をいかに優先順位の高いものにするかが大切。

全ての学生が活躍し、それを評価することで、自己肯定感を高めることができる。それが、学生を積極的にしていくのだと思う。しかし、コロナ禍が学生の活躍する場を奪ってしまっているように思う。

感 新居浜公民館では防災事業に取り組み、中高生が活動しているが、段々と活動するメンバーが固定化されていってしまっている。コロナ禍を言い訳にせず、多くの子どもが活躍する場を作りたい。

#### <野村地域自治振興協議会>

Q 地元の人間にしかこのように地域に入って行って活動はすることはできないと感じていたので、驚いた。そのようなことをしようと思ったのはなぜか？

A 地域・ふるさと教育が盛んな学校で学んでいたこともあり、大人になってからも興味があった。また、よそから来たことで見える景色がある。子どもたちにふるさとの良さを伝えたい。それがモチベーションである。

感 大三島には高校(分校)があるが、愛媛県の高校再編計画がこのまま進めば、廃校になる。高校の存続に向けて、高校生が活動している。地域の良さを県内外にアピールすることで、地域を好きになり、島に多くの人を呼び込んだり、地元に戻ってくる子どもを育成できたりするのではないかと考えている。そして、その高校生をしっかりと地域がバックアップしている。

感 コミュニティー・スクールが導入されて、地域とのつながりが増えてきている。それをさらに広げていくとよい。

感 野村中学校の復興プロジェクトがとても印象深かった。地域が子どもではなく、子ども発信というのがとてもよかった。そうすることが、子どもの成長になっていると感じた。

感 地域おこし協力隊の活動は、学校現場の負担になっては本末転倒。学校側に立って、サポートするという姿勢がいいなと感じた。

感 学校の中に入っていくためには校長が肝だと感じる。染田さんのように積極的に関わってくれと助かる。

### **全体を通しての意見感想等**

大変素晴らしい報告だったが、高齢者との交流が少ないように感じた。お年寄りに近づくハードルが高いのか、またはお年寄りが近づいてこないのかは分からないが、お年寄りの経験をいただくという活動はとても大事だと感じる。もっとお年寄りを引き込む活動があっても良い。

# 第3分散会

ファシリテーター 橋本 泰志  
分散会記録者 二宮 章紘

## ～ あおば未来プロジェクト/あおばユース WAVE ～

あおばコミュニティ・テラス 発表者 木村 壮・牧野 栞

「あおばコミュニティ・テラス」とは、神奈川県横浜市青葉区にある青少年地域活動拠点である。中高生がまちづくりや地域ボランティア活動に主体的に関わったり、地域の人や組織が情報交換を行ったりできるサードプレイスとして機能している。

「あおば未来プロジェクト」では、区内の中高生が主体となり、まちの魅力づくりや地域課題解決のための活動を行ってきた。もっと芸術を身近に感じてほしいという思いから生まれた「らくがきフェスタ」や、いじめ問題の根絶に向けた「STOP その言動！！～市が尾の希望ある未来～」という小学校での授業実践など、生活の中で感じた課題意識を、当事者として解決するプロジェクトを実践した。活動を通して、「身の回りから、地元、町、地域、国へと繋がっていく。暮らしやすい未来へと繋げていきたい。」という思いを強く抱くようになった。

中高生の活動を支えているのは、大学生サポーターという存在である。先導するのではなく、中高生が話しやすい雰囲気をつくり、彼らの持っている個性や意見を引き出すことを目指して伴走してきた。サポートをする中で、ボランティアとして責任感を持つことの難しさを感じたり、中高生の自由な発想を尊重するために事務的な活動になったりして、苦勞を感じることもあった。一方で、イベントが成功したときの達成感や自分自身のコミュニティが広がっていくワクワク感など、活動を通して味わえる楽しさもあった。関わってきた「あおばコミュニティ・テラス」の中高生は、伝える力に優れ、否定から入るのではなく「やってみよう」という前向きな子が多いことに気付いた。日々の活動を自主的に、積極的に行う中で、自己解析が無意識のうちに進み、主体性を身に付けているのだと考えられる。中高生と関わりを持つことは、大学生にとっても、多くの学びを得ることができる機会となった。固まった思考回路をほぐしてくれる中高生と出会い、共に活動することで、世代を越えて繋がっていける楽しさや自分自身の変化や成長を感じることができた。

中高生から大人まで、みんなが活躍できる場所、それが「あおばコミュニティ・テラス」である。「1つの大きな矢印ではなく、一人一人の持つ小さな矢印が、たくさん集まり、同じ方向に向かっていく場所」、「小さくてもいい矢印が、みんなで創り上げる場所」になっている。



# 地域おこし協力隊によるコロナ禍での活動

地域活動交流拠点「あすもわ」・神山地区地域おこし協力隊 発表者 井上 万里

「あすもわ」は、愛媛県八幡浜市神山地区にある公民館の分館として、2020年1月にオープンした地域活動交流拠点である。地元の中学生在が「明日も輪になってつながりよう」という思いを込めて名前をつけた。火曜日～日曜日の14時～17時に開館しており、神山地区公民館館長と地域おこし協力隊の2名が運営している。坂の上にある神山地区公民館に訪れにくい方の利用や、小学生の放課後の遊び場として活用されている。

神山地区の地域おこし協力隊として、運営に携わった当初は、移住者促進や観光客の増加、カフェやゲストハウスの運営など、大きなプロジェクトを实行しようと考えていた。しかし、地域おこし協力隊として地域のことを知っていくうちに、コロナ禍の影響で地区のお祭りや公民館行事が実施できていないことを知った。地域の需要を知り、地域内で楽しむ、地域に寄り添った活動を企画するようにシフトチェンジした。

地域に寄り添った活動として、施設のレイアウト活動や移動図書館の誘致、神山塾などを企画した。施設のレイアウト活動では、毎月子どもたちが、施設の入口や屋内に飾り付けができるようにした。毎月、テーマを設けることによって、「今月のテーマは、なんだろう？」と楽しみにする子が増え、「以前より雰囲気明るくなった」という意見をいただいた。また、毎月、市の移動図書館を呼んで、本の貸出や地域の方のしゃべり場づくりを行った。神山塾という活動では、定期的に地域の歴史や文化を学ぶイベントを開催した。毎回、講師を招いて、祭りや年中行事などを学習する場を設けた。

さらに、季節毎のイベントを企画したり、公民館行事と連携して遠出する行事を行ったりした。内容を考える際には、世界旅行をした経験を生かし、「ハロウィン」や「ピニャータ割り」など世界の遊びを楽しむ機会を取り入れた。遠出の際には、「地域住民でもあまり行ったことがなくて楽しい場所があるはずだ。」という思いで、計画を立てた。子どもたちからは、「コロナで楽しいことがなかったけど、久しぶりに楽しかった。」という感想があった。近所の寺で花見をした際には、子どもがたくさん来てくれて、寺の方も喜んでくれた。コロナ禍で、イベントをすることは大変だったが、地域の人たちと一緒に協力をしてできたことや地域貢献できたことが何よりも嬉しかった。

「あすもわ」がオープンして2年が経ち、利用者の感想を知るために、小学校の保護者向けにアンケートを実施した。様々な意見をもとに、これからも、地域住民が安心して来られる場所づくりを行っていききたい。

## ■地域活動交流拠点「あすもわ」とは



明日も輪になってつながりよう

初めは…

・移住促進  
・観光人口増加  
・カフェやゲストハウス  
もいいなあ  
・大きいことをしたい!

地域行事もできていない  
↓  
地域内でも楽しめる!  
↓  
地域に寄り添った活動に  
シフトチェンジ!



## 【質疑応答】

< ~あおば未来プロジェクト/あおばユース WAVE ~ >

Q 活動に関わって、自分の内面や地域への考え方で変化したことはあるか。

A 以前は人前で話すことや大人と話すことが苦手だったが、経験を積むにつれて、このような発表の場でも落ち着いて話せるようになった。地域についてあまり知らなかったが、調査をしていく中で、地域について学べたり、地域の人とどう接していけばいいか分かったりした。

A 商店街で店舗経営されている方や行政の方など、幅広い分野の人と関わることで、自分本位ではない考え方ができるようになってきた。計画的に物事に取り組む力が身に付き、スケジュール管理することの重要性に気付いた。プロジェクトに参加するまでは、地域の活動に積極的に参加することはなかった。この活動に実際に参加することで、地域に対して愛着が湧いてきた。今後、就職するにあたって、地域に根付いた活動を続けていけたらいいなと思うようになった。

感 サードプレイスは、その地域の人にとって、精神的な安心感を持てる場所になると思う。自分もそういう場所を作っていきたい。2人の話を聞いていて、生の体験をすることで、何かかが心に残り、心の豊かさのようなものに繋がっているように思った。非常に面白い発表だった。

Q 参加する中高生は区内だけか？

A 一部、その他の地区からも来ている。横浜市規模の活動と考えてもらいたい。

Q 定期的な集まりはあるのか。

A 月一の定例ミーティングがあり、それぞれのチームで集まって活動をしたり、近年はオンライン会議をしたりしている。中高生は学校の時間があるので、朝や夜の都合のいい時間に活動するようにしている。

Q チームづくりで意識していることや実践していることはあるか？

A 参加者の立場では、町に対して抱いた疑問や印象、目線を共有し、近い考えの者が自然と結び付きチームができ上がる印象である。ただし、「ちょっと違うかも。」と感じたら、すぐに抜け出せるような自由度の高いものになっている。

A 大学生サポーターから注意している点は、大規模になりすぎないようにしていること。大規模になると、中高生のやりたい意見がばらばらになって、同じ方向性でも頑張ろうという気持ちになりにくいので、やりたいテーマを見て、人数的には多くならないように徹底している。

Q 普段の様子はどのような感じなのか。学校の宿題をすることなどもできるのか。

A 週に3日フリースペースとして空いている。Free Wi-Fiもあるため、パソコンを使った仕事や動画視聴など、いろいろな課題を進めることができる。

Q フリースペースは大人も使えるのか？

A どの世代であっても自由に使える。

Q 開館時間はどうなっているのか？

A 月曜日と水曜日は、3時から8時まで開いている。土曜日は、1時から6時まで開いている。

Q 学生主体の活動というのが、自分が所属している団体の活動と似ていると感じた。新規メンバーの募集時期や募集方法はどのようにしているのか？

A 大々的な広報はあまりしていない。活動を通して得たネットワークを生かしてチラシを投稿してもらったり、友人同士で誘い合ったりしている。

感 中高生が主体となる活動を進めていきたいと考えていたため、非常に参考になった。

感 自身も似たような活動をしていて、「あおばコミュニティ・テラス」の活動から多くのヒントを得られた。コロナの影響で立てた計画が頓挫することもあるが、もっと活動を広げていきたいという思いがある。参考にしたい。

#### <地域おこし協力隊によるコロナ禍での活動>

Q 公民館と分けて、どのような良さがあるのか？

A 公民館は、ネガティブで暗いイメージがあるように感じる。お年寄りしか来ない、決まった人しか来ないというような問題がある等、社会教育や生涯教育には、動きが硬いところがあって、子どもたちが毎日遊びに来るような場所ではない。「誰でも、一人でも行ける。お茶でも飲みながら話ができる。」これが本来の公民館であるという考えもあって、別館を作ろうと考えた。「あすもわ」のコンセプトは、「語り場、溜まり場、遊び場、そして居場所。」である。一人で子どもたちが遊びに来られる場所にしている。

Q 施設について多くの人に知ってもらうためにどのような広報をしたのか？

A 公民館報に掲載したり、近くの小学校に依頼してイベントの参加者を募集したりした。

感 公民館主事を務めていた頃、公民館は敷居が高く、中高生の来館者が少ないと感じていた。中高生の来館者が増えるように、様々な事業をしたが、難しい面もあった。誰でも入っていける、玄関が広い施設が素敵だと感じた。

感 「あすもわ」には、おもちゃがたくさんあり、お茶やお菓子も置いている。子どもたちの遊び場をつくっている。何かを教えようというつもりはないが、遊びの中で、いろいろ学んでほしいという思いがある。

感 話を聞いていて、「イベントするから、さあ、おいで。」じゃなくて、普段から、「居心地がいいよ。」「寄ってみようかな。」という思いが重なっていくようにしたいと感じた。

#### <全体を通しての意見感想等>

八幡浜市は、コミュニティスクールの推進が遅れている。学校の問題について、大人だけが話している。今日の発表を聞いて、中高生が、自分たちで色々な話をしてもらえるような場所を作っていく必要があると改めて感じた。3年ほどかかるかもしれないが、楽しみに待っていてほしい。

公民館もNPOも、場所もあるし、ボランティアもいるが、お金がない、という問題に直面することが多々ある。営業をかけたり、資金繰りを工夫したりすることはとても大切なことである。

中高生や若い世代が活動に参加し、地域と共に歩いていくことで、地域に愛着を持ったり、地域の良さを知ることができたりしていた。大人になったときに、色々なものを還元してくれるのではないかと感じた。今日の発表を聞いて、学校とも家庭とも違うサードプレイスという自分たちの居場所があることが、素晴らしい活動に繋がっていくのではないかと感じた。

# 第4分散会

ファシリテーター 遠藤 敏朗  
分散会記録者 須山 華鈴

## 地域みんなで子どもたちを育み子どもたちと未来を育む

### 「うらほろスタイル」

NPO 法人うらほろスタイルサポート 発表者 本間 悠資

人口 4300 人の北海道浦幌町は毎年人口減少が進んでいる。これに危機感を感じ、「うらほろスタイル」の取り組みを始めた。近年成果が出てきて 20 代の転入者が増えている。特に一度町外へ出た若者が地元に戻ってくる例が増えている。「うらほろスタイル」とは、社会(浦幌)を維持させるための協働活動のこと。大人が責任を持って、子どもたちが夢と希望を抱き「この町に生まれ育ってよかった!」「引き継いでいきたい」と思える地域にすること。未来の担い手である「子どもたち」に、社会を生き抜く力を身につけてもらうこと。大人はそのサポートをすること。この2つが必要。

「次世代につなぎ続ける持続可能な地域の担い手」を育てる。小中学校主体の活動「うらほろスタイル教育」によって育まれた浦幌に対する思いを、地域が主体の活動によって実現させる。また、そうして育った中高生が「浦幌部」を作り、大人のサポートを得ながら活動している。

「うらほろスタイル教育」を通じて段階的に地域について知り、愛着を持ち、地域の未来について考える取り組みを行っている。町内の農林漁業者宅に泊まる「民泊体験学習」や「地域活性化への参画」などの取り組みをしている。

若者が徐々に増えつつある今、雇用の場を増やすための取り組みとして、平成25年より「若者のしごと創造事業」を開始した。



### 小中一貫の教育課程内で行われる「うらほろスタイル教育」



#### 具体的な取り組み例①「民泊体験学習」(小5)

- ・町内の農林漁業者宅に、1泊2日泊まり込みで生活体験。(1家庭に対し約児童3~4名)
- ・作業体験を通じ、産業理解をはかるとともに、初めて会う他者に、ありのままの自分を家族の一員として受け入れられる体験を通して、自らの尊厳を実感する。



親や先生以外で、ありのままの自分を受け入れ、本気で向き合ってくれる大人 = 「信じられる他人」との出会いが、自己肯定感・自己有用感、社会への当事者意識・地域への愛着の形成につながる

#### 具体的な取り組み例②「地域活性化への参画」(中3)

- ・大好きなふるさと浦幌をよりよい町にするための企画を地域の大人たちへ提案。企画はその後、想いを託された大人が、真剣に向き合い、実現への道を切り拓かれていく。
- ・近年では、生徒たちも企画の提案に留まらず、自ら実行に移す活動に。ここでも大人たちは生徒たちの想いに向き合い、生徒が自らの想いを実現できるようなサポートをする。



# よみがえれ！亀ヶ池温泉

よみがえれ！亀ヶ池温泉プロジェクト 発表者 阿部 眞子，浅野 さやか

愛媛県最西端の町、伊方町にある「亀ヶ池温泉」。2021年8月19日に落雷により火災発生、施設の約半分が消失してしまった。若者だからこそ出来ることがあるのではないかと、伊方町に所縁のある大学生を集め、「よみがえれ！亀ヶ池温泉プロジェクト」を立ち上げた。以前より交流のあった、町内唯一の高校「三崎高校」と連携し、大学生×高校生で活動している。そこに役場や建設事業者も

★

2022年3月4日  
伊方町の第6回再建検討委員会で発表



交えワークショップを開き、再建に向けて意見交換を実施。出た意見のうちのいくつかを大学生がピッ

クアップし、より細かなプランを作成、提案書を再建検討委員会に提出した。現在は、直接再建について関与していないが、今後の動向をチェックしていきたい。

本プロジェクトを通じて、若者の持つ可能性と地域の人々の温かさを感じた。また、高校生も大学生も、地域の問題に対して当事者意識の高まりを感じる事ができた。

☆

## ワークショップの様子

3つのグループに分かれて亀ヶ池温泉や伊方町の未来を語り合った。

あったらいいな！

こんなこと嬉しい！



多彩なアイデアを創出

それぞれのグループから  
構想アイデアをまとめた

## 【質疑応答】

<うらほろスタイルサポート>

Q 事業が始まった経緯について、主体はどこなのか？

A きっかけは浦幌町から高校がなくなったこと。町内から子どもたちが出て行ってしまいうので、出ていく前に町の魅力を知ってもらおうと町民が一部活動をしていたが中々子どもが集まらなかった。学校側も先生が小さな町出身であることに対して自信を持たない子がいるのではないかと不安を抱えていた。そうした地域の人の中に PTA 役員をしている方がおり、そこから話が広がり活動が始まったので、当初は行政は一切関与していなかった。

Q 浦幌部について、町外に出た子どもたちが放課後に行っているのか？時期や頻度などはどのようなものか。

A 高校生に関しては、始めは町内から通いの子たちが帰宅後夜に活動していた。学校に紐づいたものではなく、最初は高校生が内々で行っていた。頻度は高校生たちが決めているが時期によって頻度は異なる。平均すると週に1回程度。

Q 高校生たちとの関係づくりで気を付けていることは？

A 浦幌部の立ち上げメンバーは「うらほろ教育」開始時小学校1年生だった世代。学校教育の中で育まれた地域への愛着が実を結んでいるように感じる。

Q NPOの事業費は？

A うらほろスタイルは900万から1000万、2名の職員に1名のパート。法人を維持するために他の業務も委託してもらい、維持している。

Q 学校は定期的にトップが変わり、そのたびに、変わらないのか？

A 仕組み的な工夫として、コミュニティスクールを採用している。学校だけで決められなくなっている。継続してきたので最近では周辺地域にも知られてきているので受け入れられてきている。あくまでも地域側からの押し付けにならないように、「このような授業がしたいならこの人が手伝えますよ」など提案している。先生の負担が減るような取り組みを意識している。

#### <よみがえれ！亀ヶ池温泉プロジェクト>

Q 若者の気付きならではと言われていたが、特にどんなことがあるのか？

A 町内で暮らす高校生ならではの意見が多く見られた。交通手段がないというのは、車移動に慣れている大人では見落としがちな点であった。勉強が出来たりみんなで集まって話せたりするようなスペースが欲しいという意見。

Q 実現可能性を見てアイデアを絞っていったと思うが、どうか？

A まずは予算について。あらかじめの建設予定は組まれていたので、後付けで出来るものなどに絞っていった。

Q 赤ちゃんを連れてでも入れる工夫や子育て世代向けの案などは出たか？

A 高校生の提案の中に「誰でも気軽に立ち寄れるスペース」というのがあったが、そうしたスペースで子育て支援のイベントや高齢者向けの健康教室などを行ってはどうかという意見があった。

#### <全体を通しての意見感想等>

自分も今まで地元のことをよく知らないと気付き、改めて地域について関心を持った。また、知識でしか地域教育について学んでなかったが、同じ学生という立場でもこうして行動に移しているのを見て、刺激をもらった。町長など役所に直接話ができるというのも、地方ならではの強みに感じた。

子どもたちからの意見、子どもたちからの思いから事業を行うというのは、子どもたちにとっても良い経験だなと思った。

子どもたちの目線で子どもたちだからこそできる実践というのものもあるなと気付いた。

大人が言うよりも子どもたちから発信した方が有効なことがある。仕掛けるのは大人だが、主体で活動するのは子どもでありたい。

行政と学校が繋がっていくことがこれからは必要。

# 第5分散会

ファシリテーター 今井 博志  
分散会記録者 池田 悠人

## 富良野市教育委員会（富良野市子ども会育成連絡協議会）

富良野市子ども会育成連絡協議会 発表者 藤野 翔太

富良野市子ども会育成連絡協議会では、「子ども会活動と学びと活動の循環」をテーマに活動を行っている。活動の一環として、「ね～びる」という高校生主体の活動団体がある。ね～びるは、平成2年から続く高校生ボランティアサークルであり、地域の子供会の運営補助や「遊びの出前」などを行っており、OBOGは卒業後も、活動の補助を行っている。

それに関連する活動として、子ども会では、小学4年生～中学生を対象に、リーダー研修会を実施し、地域に根ざした子供会の活動を推進している。そこでは、小中学生、ね～びる、ね～びるOBOGなどがそれぞれの役割をもって活動し、リーダーに必要な基礎的な知識や技能を身につけるための活動を行っている。

活動のテーマである「活動の学びと活動の循環」とは、小中学生、ね～びる、ね～びるOBOG、育成員・事務局員たちそれぞれが活動から得る学びによって、これからの地域を育てていくサイクルのことである。例えば、小中学生はね～びるに対して憧れを抱き、次にね～びるを目指す。ね～びるは小中学生と関わったことによって、自分の進路に大きな影響を受けたり、地域へのボランティアへの参加に積極的になったりする。また、ね～びるは、OBOGが高校卒業後に、自由な形でリーダー研修会に参加する様子を見て、今後も活動へ継続して参加をしようと呼び起される。大人になったOBOGは、育成員や事務局となるなどして、地域との関わりを大切にして、まちづくりに関わる人材になったり、次の担い手の育成に関わったりしている。このように活動が循環し、30年以上も継続し、地域に愛着をもつような循環が生まれている。コロナ禍の中でも、人数制限をしたり、日程を見直したりして、工夫しながら活動を継続している。

リーダー研修会は、「地域に根ざした子ども会活動の推進」「リーダーに必要な基礎的な知識などの習得」を主な目的としているが、参加者にとっての「居場所」「自分を変えるきっかけ」にもなっている。人間関係形成、成功体験を得て、郷土愛をもつ地域の担い手を育成し、関係人口の創出を期待してこれからも活動を続けていく。



○富良野市子ども会の取り組み

<事業成果と「思い」>

・小学生から大人までの多世代が関わることで得られる楽しかった思い出、違う学校の子ども同士の新しい人間関係、達成感や成功体験を得られる事業プログラム。を通して学びと活動の循環を生み、「郷土愛の育み」「地域の担い手育成」「関係人口の創出」につながっていくことを期待し、実際に長年にわたりその循環でつながっています。

・富良野が「ただ生まれ育った町」ではなく、「ずっと関わってみたい、どこかでつながってみたい町」になるように・・・



# オンライン防災グループの活動紹介

オンライン防災グループ 発表者 堀江 俊佑

オンライン防災グループの目的はコロナ禍での防災活動が行いにくくなったが、災害の発生は待ってくれないためオンラインで防災の学びや交流を行っている。活動の内容は、オンラインの ZOOM で防災講演会を行っており、2020 年 11 月から 2022 年 11 月までに既に 46 回開催している。

講演会に参加できなかった方やもう一度学び直したい方のために、講師の方からの許可や参加者のプライバシーに配慮しながら講演会のビデオの販売を行っている。

また、「防災カフェやオンライン飲みをオンライン防災グループでも」というコンセプトで、オンライン防災おしゃべり会を開催している。そこでは、防災の内容に限らず、自由な内容で会話をして交流しながら仲間づくりの場にもなっている。

プロジェクト活動として2つの活動を行っている。

1つ目は、オンラインでつくる持病のある方のための防災パンフレットの作成である。これは、持病により日常的に薬を服用している人が災害時に薬に困らないような備えを啓発するための資料をつくることを目的としている。

2つ目は、オンラインでつくる感染症対策 HUG(避難所運営ゲーム)である。これは、避難所運営ゲームに感染症対策を取り入れたアレンジを加えたもので、防災士や教育関係者、大学生などが関わり実施している。

オンライン防災グループ以外でもオンラインで防災活動を行っている。

例えば、大学間、高校間、大学と高校間で交流しながら、防災に関心のある学生たちがオンライン防災交流を行っている活動がある。他にも、東日本大震災の避難所運営の経験から作られた避難所運営ワークショップ「さすけなぶる」のオンライン化に取り組んでいる。これまでは対面で実施していたが、オンラインでも実施できるようにしている。今後の展望は、活動運営の人材や参加者、資金の確保をしつつ、新たなプロジェクトを立ち上げ、防災のツールや価値の開発に力を入れ、おしゃべり会のバージョンアップなどを図っていくことである。また、今後は特定のテーマや属性に合わせた活動も行っていきたい。

オンラインのコミュニティをつくることは、現実のリアルな地域だけではなく、オンライン上に新たな地域ができ、新しい価値が作られていくものと考えている。

## オンライン防災グループの目的

- ・ コロナ禍で対面での防災活動が行いにくくなった。
- ・ しかし災害の発生は待ってはくれない。



## オンライン防災グループの今後

- ・ 運営に関わる人を増やす。
- ・ 活動資金の確保方法を検討する。
- ・ 特定のテーマや属性にあわせた活動をつくる。



## 【質疑応答】

< 富良野市教育委員会(富良野市子ども会育成連絡協議会) >

Q ね～びるの由来は？

A ね～びるとは、へそを意味するネーブルを参加者がネービルと読み間違えたことに由来する。  
ちなみに、富良野市はへそ祭りや、へそまんじゅうがあるようにへそが有名である。

Q 準備で大変なことは？

A スケジュール考える際に、参加者を飽きさせないようにしている。飽きさせないだけではなく何を子どもに感じさせるかを考えることが難しく、使える場所やものが限られている。

Q 最近の子どもは、学校で人間関係について難しさを抱える子どもが多い。屋外活動好きな子ども、苦手な子どもの二極化にどう対応する？

A 参加者は、子どもを屋外活動に参加させたい親からの希望もあり、特に4年生の参加希望が多い。リピーターも多い。年齢が上がると、忙しくて参加者が減っていくため、継続して参加する場合、経験者としての役割を与えられるようにしている。

ね～びるの参加者には、不登校や留年している子どももいる。学校生活には難しさを感じている子どもも、ね～びるには積極的で、普段よりも自己開示ができ、活躍の場や居場所になっている。

Q 予算はどうしている？

A 市からの補助金を得たり、参加者からの参加費(キャンプ3000円、施設4000円)を徴収したりしている。

Q リーダー育成において地域にもどって来やすい仕組みはあるのか？

A 基本的にはそのような仕組みはない。活動に戻ってくるために、地元で就職する人も中にはいるが、子ども会で、受け皿を用意することはできていない。戻って来やすくするには、仕事を斡旋できるような仕組みがあるといい。

Q 4年生の参加希望者が多く、循環のスタートができてるのがよい。なぜ多いのか？

A 理由はいくつかある。1つ目は、富良野市には屋外活動が少ないため、屋外活動に参加させたい親が多い。2つ目は、小規模・僻地の学校から交流を求めて来たり、他の学校や市外の子どもと関わりたい子どもが来ていたりする。3つ目に、自分の兄弟が参加している姿を見て、その影響から参加を希望する子どもも多い。

Q 定員を超える希望はある？

A コロナ前は超えることもあったが、今は自粛している保護者多いため、超えないことがおおい。もしも超過した場合は、先着順にしているためキャンセル待ちにしている。

Q 小中学生の参加者は子ども会のつながりから活動に参加しているが、高校生はどこから？

A 小中学生の頃に参加してそのままね～びるになることもある。その他にも、市内の高校に部活動紹介のときにね～びるの紹介をしたり、ポスターやチラシを配布したりしている。

< オンライン防災グループの活動紹介 >

Q 講演会、おしゃべり会のターゲットの年齢層はどれくらい？

A 全年齢対象。色々な人が集まることで、多様な意見が交流されることがねらい。  
実際には、40～60代の参加者が多い

Q 告知はどのようにしている？

A フェイスブックやメールで告知している。フェイスブックの参加者は350名程度。

オンライン防災コミュニティには、1500名を超えるものもあるため、もっと周知していき  
たい。新規の参加者を募るために、現参加者に周りへの紹介を呼び掛けている。

Q 活動を始めたきっかけは？

A きっかけは、高校生のとき地学に興味があり、高知大学で地学・災害に関する学科に入ったこ  
と、防災に関するサークルに入ったこと。当時から継続している。活動歴は12年目。期待して  
くれている人のために、続けている。

感 防災について、人との人の接点を作ることで、互いの活動にいい影響を与えている。活動と活  
動が繋がることで、オンラインだけではなく、オフラインでも活動を広げることができている。

Q 一人で活動しているが、現在の立場は？

A 防災アドバイザーとして活動している。今後これを仕事として成立させるために他にも挑戦し  
ていきたい。資金調達には苦労している。

感 おやじの会などと同じく、個人事業としてするのは難しいため、NPO などにすることで助成  
金を得て、活動を続けるとよいのではないか。クラウドファンディングもあるが、難しいと思う。

Q 防災かるたはどのように活用されている？

A 消防団のイベントなど、つながりがある団体や同じような活動をしている人との活動の中で活  
用している。かるた以外にも神経衰弱もあり、遊ぶには知識があるので、大人も勉強になる。

### <全体を通しての意見感想等>

自分の身を削って活動していることに驚くとともに素晴らしいと思った。

防災はいざという時に動いていきたいと思っている人がつながると活動が広がっていくので  
はないか。

多様な考えが集まる仕組みをつくり、議論することが大切である。

ふるさとを大切にす地域づくりをしたり、オンラインなどでの活動が広がり現実でもつなが  
ったりしていきたい。

# 第6分散会

ファシリテーター 田中 行  
分散会記録者 八木 正汰

## 豊栄郷土カルタ～多様な主体とのつながりで育む地域の未来～

豊栄郷土カルタを作ろう会 発表者 堀川 南・前濱 恭子

### 1 講座設定の理由

「豊栄郷土カルタ」は、広島県東広島市豊栄地区の魅力や歴史を題材としたカルタである。豊栄地区は、人口減少に伴って学校数が一つになり、児童はバス通学であることから、寄り道や遊びながら帰ることがほぼなくなってしまった。そのため、地域の宝や史跡、歴史、文化産業に触れないまま豊栄を出る子どもが多数いる現状がある。

そこで、子どものうちに豊栄の魅力に気付き、愛着をもつことで地元を離れていても心がつながり、ふるさとに帰って来ることができるように心に残るような機会をつくりたい、というのがこの活動を始めたきっかけである。

### 講座設定の理由



豊栄町内の史跡・歴史・文化・産業・自然・特産物などを子ども達に分かりやすい形にして伝承し、故郷に愛着を持ち心のふるさととして残していきたい(小中学校・地域と連携)

### 2 活動の過程と問題点

#### 1年目

～準備・小学校、地域との連携～

- ・ 10人の有志メンバーを募る。
- ・ 3年計画の立案

1年目(小学校・地域と連携)、2年目(地域探検ツアー開催)、3年目(カルタづくり)

- ・ 有志の他、民間企業や地域の方に御尽力いただき、よりよくそして協力者の自己実現につなげていけるような考えも検討した。

問題点～準備の難航～

- ・ 活動資金は支援申請をすることで調達した。
- ・ 先生の異動による情報整理の難しさがあったが、毎年、学校に出向いて状況を整理した。また、児童のバス通学を待つ時間を工面してやりとりを行った。さらに、絵画クラブと協力しカルタの取り札の原画制作を行った。

#### 2年目

～地域探検ツアーの開催～

- ・ 各地区の担当を割り振り、6回の探検を行った。

- ・ 社会福祉協議会でバスを借りて送迎を行った。探検内容は有志メンバーで検討し、「ナニコレ珍50景」というタイトルにしたリクイズシートや「がんばったで賞」の配布等をしたりして活動を工夫した。

問題点2 ~ 探検開催目前にしてコロナ禍突入 ~

- ・ 会議は LINE や WEB 会議を駆使して行った。秋まで行い、関係を途絶えさせないことに注力した。
- ・ 人数制限に伴ってツアーができなかった地域もあるが、少人数で冬にツアーを開催した。

3年目

~ カルタづくり、完成 ~

- ・ 2年目に探検ツアーが行えなかった4地域でツアーを開催
- ・ 小学生がカルタづくりを行い、未完成の札は中学生に作成を依頼した。絵にするには難しい内容もあったが子ども達の協力によって全て作成することができた。

問題点 ~ カルタの役割 ~

- ・ カルタだと地域調べの参考資料として持ち歩きにくいので、手持ち資料の作成 A4 サイズの冊子を作成した。冊子はカルタの取り札、読み札、説明文を記載したものとし、希望者に無料配布した。
- ・ 令和4年3月より原画展を開催した。2週間ほどの実施予定だったが好評につき 11 月まで延期した。

3 取組みを終えて

- ・ 地域の方・様々な機関の協力や絵画サークルによる絵の支援もあり、地域学校協働活動の一環として取り組むことができた。
- ・ 今後はカルタを通して豊栄の宝を広く知ってもらい、新発見のきっかけにしていきたい。

## うわじま圏域子ども観光大使

うわじま圏域子ども観光大使実行委員会 発表者 信藤 明秀

1 うわじま圏域子ども観光大使とは

宇和島圏域を誇りに思う子達を育て続ける取組で、現在は8期生まで認定されており、認定者数は292名である。第10期からの5年間は、宇和島市、鬼北町、松野町、愛南町の4市町としての「うわじま圏域子ども観光大使」として活動予定である。

2 講座の内容(第1期生)

- 第1講座 真珠の球出しとアクセサリ作り「自分の手で真珠を取り出し作る」
- 第2講座 みかん狩り「自分の手でみかんをとる」
- 第3講座 鯛めし作り「自分の手で魚をさばき鯛飯をつくる」

- ・ 自分の手を使い五感をフルに活用することで子ども達の記憶に強く残り、子どもたちが宇和島を誇りに思うようになる。

### 3 講座の充実(選択講座、基礎講座)

- 養殖魚、じゃこ天、マダイの稚魚放流、魚釣り、鯛そうめん、稲刈り等の選択講座を設ける。
- 宇和島の魅力の概略、伊達家の歴史、宇和島の偉人等の全員必修の基礎講座を設定する。
- 講師を務めるのは若い世代。

### 4 うわじま圏域子ども観光大使に必要な3つの力

- 活動力...地域の良さを学び継続的に体験している。  
例)自分の手で行う鯛飯づくりやミカン狩り。
- 知識力...地域の良さについて一定の知識を身につけている。  
例)全員必須受講の基礎講座や認定試験。
- 発信力...地域の良さを発信している。  
例)体験をさせていただいた方に対してお礼の手紙や毎回行う感想発表。

### 5 宇和島を飛び出して発信

- 子ども観光大使の全国大会  
西日本豪雨によって流されたみかんの木を立て直すに至るまでの劇の発表。
- 県庁訪問  
県庁に訪問し、中村知事へも宇和島のPR
- 認定式での発表

### 6 終わりに

- 今後もふるさとを誇りに思う子どもたちを育て続ける。
- 認定式での児童の発表原稿より抜粋  
「この宇和島には、緑豊かな山、おいしい魚、広い広い海、きらきらと光った川、そして何よりも人々のやさしさがあります。宇和島には、たくさんの よいところがあり、わたしたちはこんな宇和島に生まれて本当に幸せだなと感じました。」



## 【質疑応答】

< 豊栄郷土カルタを作ろう会 >

Q 子ども達以外の地域の方から意見は？

A 町内の魅力の再発見があったり、カルタで描かれている場所に行ってみたい、という意見が多くあった。

Q アンケート回答者の年齢層は？

A 幅広い年齢層の方が回答してくださっており、概ね高評価だった。

Q お気に入りの読み札・取り札は？

A 「笑顔あふれる ハートの形の 豊栄町」地形がハートであることをこの活動で児童が発見した。「卵のせ へそ丼食べたら 元気百倍」もへその町とも言われるところからお勧めである。

Q 作ったカルタは今後どのように活用していくのか？

A 各サロンや地域センターでカルタ大会を行う。2月には大きなサイズにして大カルタ大会を開催予定。冊子を生かして地域の情報発信につなげたい。

Q へそ丼の具材は？

A 食べるラー油、豊栄産地の卵とネギ

感 自然以外の魅力（文化歴史）発見があり、そこにカルタづくりの意義がある。

< うわじま圏域子ども観光大使実行委員会 >

Q 即時定員になるくらい魅力は伝わっていると感じている。そのPR方は？

A 人が人を呼ぶ。声を掛けてくれてあっという間に応募締切になる。

Q 実行委員会の協力団体の組織、予算、講師等の活動内容は？

A はじめは教師の仲間から。予算は、第1期、第3期、第4期は「ゆめ基金」を活用した。第5期生からは、宇和島市、鬼北町、松野町から助成いただいております。第5～9期の5年間は、3市町から助成していただいた。第10期以降の5年間は、愛南町も入ってくださり、4市町から助成していただくことになっている。

感 立派な教育をすればするほど帰ってこない。帰ってこようと思う。

感 魅力なきものに人は集わない。

## < 全体を通しての意見・感想等 >

体験をしてからカルタづくりをして発信していくという流れによって、子どもたちが地域に愛着がもちやすい。

社会教育はさまざまな方の協力、力によって成り立っていくものであることを感じた。

# 第7分散会

ファシリテーター 吉田 和仁  
分散会記録者 高田 容弘

## ～人をつなげ、地域づくりを展開するコミュニティカフェ事業～

ヘルシーカフェのら（合同会社のら） 発表者 新井 純子

当時転勤族だった自分にとって二人の子育ては大変だった。自分の責任だと思っていた中、社会教育に出会い「私の課題はみんなの課題」として「のら」を運営している。

### やっていること

2009年から飲食提供と地域課題解決のためのワークショップの2本柱で運営。飲食提供は、基本地産地消。野菜、米などすべて埼玉県産。小さなボックスがあり、ひと月3000円で、販売してもいいし自分たちの発表をしてもよい。チラシは、行政、個人を含め基本断らずに置いている。共有室では様々なワークショップも開催している。2019年には10年を迎え、これまでに1000以上のワークショップが開催された。地域貢献として、小学校のまち探検、中学生の職場体験、ハロウィン、大学生の卒業論文の実践の場としても利用されている。

### 来てくださる方々

生後21日目の赤ちゃんから、90代の方まで様々である。大学生は、ひとり親家庭のための会や留学生と地域の方の交流会、子ども食堂などたくさんの企画を持ってやってくる。ワーキングマザー。家と会社がきちんとしていればどうかなと思っていたが、「のらさんと出会って、地域ってすごく大切」だと言っている。月一回の子どもカフェなど様々なことを企画してやっている。お客様から主催者になっていく方がたくさんいる。

### コロナ禍の中で

2020年からの新型コロナウイルス感染症の流行で「集まる」「しゃべる」ができなくなった。しかし、だからこそ社会の暮らしには、人が生きていく上での必要な仕事、エッセンシャルワークと、人が集まって気楽なおしゃべりができる「のら」のような場所の重要性に気付けた時期でもあった。

### つながる場

飲食も出しているが、ここに来る人たちがつながる、出会う場所なのだと思いつくづいている。たまたま来たお客さんたちが出会ったらおもしろいと思っていると、そこで名刺交換会が始まって、次々と企画が始まろうとしている。住んでいる地域にはすばらしい力を持っている人がたくさんいることが証明されている。さいたま市だけでなく、どこの地域にも言える。人が集まれば新たなことが始まる、広がる、つながる、続くということのをのらを

### 横断的な課題解決の場づくり

- 様々な人の出会いの場
  - 女性の学習支援
  - 高齢者の生きがい支援、就労支援
  - 若者のソーシャル・スキル・トレーニング、就労支援
  - 子育て支援、子育て支援
  - 共働き家庭の買い物等の家事支援
  - 保育所等への送迎支援
  - 女性の健康づくり支援
  - 民間公民館機能
  - 地域のコミュニティづくり支援
  - 市民活動支援
  - 地産地消費の食べ物
- 

### やっていること



### つながる場



やっけていて感じる。今後はさらなる人とのつながりを生かして、また、様々な組織とネットワークを構築しながら横断的に地域課題を解決するきっかけの場にしていきたいと思っている。

## ～伊予市三秋地区の放置竹林を活用した軽スポーツ “モルック”の実践

愛媛大学社会共創学部 牛山ゼミ・学生プロジェクトチーム 青木建汰・伊藤義樹・君岡きらら

令和2年度から愛媛大学と伊予市三秋地区の連携・協働によるプロジェクトを継続し、中でも地域課題「放置竹林」を活用する取組を進めてきた。コロナ禍で地域スポーツは疲弊し、大人数が密集する従来型運動会などは開催することさえ困難になった。その一方で、イベント参加者同士が適度に距離を保ちながら、年齢を問わず誰もが楽しめる「モルック」のような軽スポーツを導入する動きが現れた。この新たな動きの支援として、竹を原料とする「竹モルック」を考案し、その普及に取り組んでいる。『軽スポーツ』×『地域資源』×『交流』による地域の活性化と魅力の創出を目指している。

### 伊予市中村地区における「地域のスポーツイベントの再興」

1988年から続く北山崎地区の北山潮風運動会。参加者の減少、マンネリ化、コロナによる開催中止など存続の危機となっていた。そのような中、三秋地区は放置竹林問題を抱えており、モルックの競技物に三秋の竹を使用し、スポーツを通して放置竹林問題に触れて欲しいという住民の思いを受け、「4つのキーワード」を基に計画を進めた。

### モルックづくり体験会

モルックづくり体験会を開催し、参加者(子ども)に放置竹林問題に触れてもらうとともに、地域住民の交流、主体的な学びの体験(モルックを作る・する)ができるようにした。当日は、5組の親子が参加した。モルック作成後は実際にゲームをした。終了時刻になってもなかなかプレイをやめないお子さんが出るほど熱中していた。

### 中村地区スポーツ大会開催

児童8名、保護者4名、一般参加者24名の参加があり、大いに盛り上がった。

アンケートの結果から、子どもは、ワクワクドキドキした。投げて楽しい。大人は、達成感や爽快感を感じていた。今後も地域イベントは必要という質問には、85%が必要と答えた。必要ないと答えた方は一人もいなかった。年齢・性別を超えられるスポーツであり、コミュニケーションの機会を創出

**研究 研究 方法**

再興に向けて4つのキーワード

- 01 子供や地域住民の笑顔を取り戻す
- 02 マンネリ化解消による参加者の増加
- 03 地域資源を活用する(SDGs)
- 04 継続性を持つ 新たな地域イベントの創出

モルック：原料 スギ 竹で挑戦！

**参加者(子供)**

- ✓ 放置竹林問題に触れる
- ✓ 地域住民との交流
- ✓ 主体的な学びの体験 (モルックを作る・する)

**主催者(学生)**

- ◆ イベントの進行
- ◆ 地域住民との交流
- ◆ 主体的な学びの体験 (子供とのかかわり方)

11/5中村地区スポーツ大会開催!!

場所	北山崎小学校
時間	9時～11時
児童(小学生～2年生)	8名
保護者	4名
一般参加者	24名
スポーツ設備等	1名

小学生、本気の対決!!

開会式&モルックをレクチャー

することができた。地域コミュニティの活性化を肌で感じた。

地域住民が望んでいることは、小さな子から年配の方まで皆がコミュニケーションをとることができる異世代交流である。そこに学生が地域を繋ぐ架け橋になることが適していると思う。

来年、大学を卒業し、継続的に中村地区に関わるのが難しくなる。地域の方には若い人たちが入ってきやすい仕組みやネットワークづくりに力を入れてほしい。

## 【質疑応答】

< ~人をつなげ、地域づくりを展開するコミュニティカフェ事業~ >

Q 2009年から10年以上ワークショップを続けてきている。やり続けるということは難しく、その中で変化があると思うが、どんな変化がありどう乗り切ってきたか。

A 学生とも付き合っているが、就職していくので次の代というようになかなか繋がらない。それでもいいと思っているが、それを伝えてくれる誰かがいるといい。思いを持っている人、学生さんはけっこういると思っている。そのキーパーソンが学校の先生。大学には地域の関わりのある人が来ているが、先生がずっと学生と関わりを持っているので先生がいいのではないと思う。学生もゼミで、やろうと思ったり気が付いたりする。その思いが学生で完結するだけでなく、いろいろと人に伝わっていくとよい。10年というよりも、コロナで変わった。自分も年をとる。来ている人たちがいろいろやれるということが分かった。海外に行ったとき、自分は日本の不満を言っていたが、諸外国の人は自慢してくる。今は、さいたま最高だと思っている。半径2kmを最高だと思っている。そこが自分自身も変わったことだと思う。そして、そこに素晴らしい地域の人住んでいる。新井さんの所だから、さいたま市だからだよとよく言われるが、そんなことはなくて、どこにもすてきな人がいる。出会ってないだけ。いいよって人をつかまえる、伝えることが大切。子育て支援をしている方に言われたが、行政は施設などを作るけど根本は変わっていない。みんな孤立している。行ける人はいけるけど行けない人はいけない。いろいろな状況の人がいると思えば、小さなことをたくさん、いろいろなことをやっていくのがいい。

- 大学でも後輩に引き継いでいけていない。引き継いでいけるかがストレスなので、地域の活動にフェードインさせていくような、大学の仕組みや部署を大きくしていくと変わっていくのではないかと考えている。
- 若い人についていくのがモットー。わたしのやり方、時代はこうだったとはなるべく言わないようにしている。

Q 最初のきっかけは子育てを悩んだところからスタートして、小中高大学生まで来るいいところだと思った。勝手なイメージだが、人口130万人で若い人が増えていていいなと思う。子育てのことで、保護者の方とつながりができたとか、子育てのことで貢献できたということがあれば教えてほしい。

A 今、「思いがけず利他」という本が好きで自分もそういう風になりたいと思っている。研究をしているわけじゃないから成績調査はしていない。お客さんが主役になってイベントをしてくれるとか、130万人がすべてがのらに来るとは決して思っていない。大事なことは近くにいる人だといつも思っている。公的なことを自分たちで勝手にやっているみたいなのところがある。地域の学校

からものらに行きたいという子もいる。保護者の方も一緒に来ると、子どものとき、赤ちゃんのとき来ていましたという話をよくしてくれる。そうすると、子どもたちも行きたいと言ってくれる。それを聞くと、続けてきてよかったと思う。地域が違うのでこれが全部の地域に当てはまるとは思わない。教育と同じように今日明日の話ではないことをやっているをつくづく思う。

Q ヘルシーカフェの活動はまさに地域の公民館となっている。地域を結び付けてどんなことをしたいのか。

A つながりがあつたらいい。若年齢の方の貧困。子どもの貧困。行政はすべて縦割り。手を結んでいかないと。50歳の引きこもりの女性をヘルパーさんが面倒みている。分断のない社会づくり。途切れない支援が必要である。

Q 合同会社にあえてそうした？

A 株式会社にもすぐに移行できるし、出資者も参加できる。何人かと立ち上げている。それぞれの組織に一長一短ある。助成金も会社だからいただける。

< ~伊予市三秋地区の放置竹林を活用した軽スポーツ“モルック”の実践>

Q 社会共創学部とは、必ず地域に入って活動していかないといけない学部なのか？

A この学部を卒業するためには入っていかざるを得ないのがこの学部。

・ 連携は伊予市と愛媛大学が協定を結んでいる。愛媛大学に窓口がある。地域の人も継続して来てほしいと思っている。

Q パワーポイントの作り方からすばらしい。今の人たちなのだ実感した。スマホを教えるとか地域でやっていないのか？今の人たちならできることがたくさんあると感動した。

A やっている。スマートフォンを使って、シルバー人材センター主催の会で、ウォーキングアプリを利用して教室を開催した。

Q モルックを親子でつくる活動がいいと思った。作るにあたって、道具などはどうしたのか？安全面など活動にあたっての保険は？

A 中村地区公民館の行事としてモルックを行った。道具は小学校のものを借りた。足りない道具は予算から購入した。学生が見守ったり親子で参加していただいたりするようにした。公民館、市役所は行事をする上で保険に入っている。公民館との共催。大学生がやりたいことをやれるようにして下さっていることがありがたい。

Q なぜ作るころから始めようと思ったのか。原動力は何なのか。

A 放置竹林問題に触れるためにはモルックを作るところから始めるのがよいと考えた。

Q 自分たちが大切にしていることは？

A 大学の先生からの誘いから始まった。自分の思いは楽しんで喜んでもらいたい。地域にお邪魔すると、「これ食べて」とか野菜持って帰ってなど温かい。こんなにしてもらうなら、期待に応えたい。喜ばせたい。という気持ちがどんどん芽生えた。

自分が楽しみたい。自ら楽しんでいきたいという思いを大切にしている。自分が楽しんでいたら周りが笑顔になっている。その笑顔に何かにつながっていくのではないかと思う。

< 全体を通しての意見感想等 >

新居浜公民館「次世代ネットワーク」では、防災事業、放課後子ども教室のサポートを行って

いる。防災事業では、初めは大人から言われたことをやっていたが、今は企画から進行まですべてを行っている。放課後子ども教室は、小学生全学年を対象に、レクリエーションゲームなどを自ら考え連絡し、当日のサポートをしている。自分に今何ができるか考えて活動している。

コロナが出て、祭り、飲み会がほとんどできない。獅子舞などの練習からちっちゃなつながりができていくのにできない。コロナ禍が明けてどうなっていくのか。大学生の活躍の場はこれからたくさんある。コミュニティ・スクールにもコミットして欲しい。

# 第8分散会

ファシリテーター 武智 理恵  
分散会記録者 宇津 博美

## むすび、ころりん！まあるく繋がる“みんなの輪”

寺家田んぼ“むすび” 発表者 大熊 摩利

横浜市青葉区寺家町にある寺家ふるさと村内の田んぼを拠点に、稲作を事業の中心に置き活動している。歯科医をしている中で、現代社会に潜む様々な社会問題に対してできることはないかと考えていたところ、縁があってこの活動を始めることとなった。「寺家田んぼ“むすび”」の名前には、最初は小さな繋がりでも、手と手を取り合い、みんなで知恵と労力と気持ちを出し合う中でいろいろなご縁が繋がり、いずれ、みんながまあるく繋がっていきますよという思いを込めた。



6月の田植えでは、参加した380名のみんなが泥んこになり、子どもも大人も笑顔になった。参加者には、参加賞として昨年収穫したお米と米粉で作った米粉クッキーやむすびバッジをプレゼントした。稲刈りには、320名の参加があり、今年の田んぼにも様々な背景を持った子どもや大人が集まってくれた。田んぼの中では、みんな同じで黙々と稲刈りをしてくれた。今年は、320kgの米を収穫することができた。また、物販販売にも取り組み、地域にどんな人がいるのかを知ってもらう場になっている。身近にある様々な事業所の物品とそれを作る人がいて、それを買う人がいる。人と人が物を通して繋がる瞬間となっている。



この活動は、ただ田んぼで田植えをし、稲刈りをする。しかし、そこに集まる“人”は、認知症の高齢者や引きこもりの方、精神疾患を持っている方、身体障がいを持っている方など多様であり、その多様性が田んぼの中では不思議と見えなくなる。それが当たり前の世界がそこにある。一步外の世界に出ると、差別や偏見が存在するが、田んぼの中だと健常

者や障がい者、高齢者、子ども、大人など、そんなことは一切関係なく、みんな一緒になる。誰にも何も比較されず、評価もされない。スタートもゴールもみんな一緒。そこに集まり、その一つの点である“人”と“人”が一つの目的のために、協力したり、されたり、いつしかその点と点が近くなり、いくつも連な

っていくとそれが線になっていく。それがぐるっと回って、“ ”となってまあるくつながっていく。そんな関係が田んぼの外にも繋がることを願って活動している。

## コロナ禍での活動と葛藤

### 防災リーダークラブ 発表者 天野 里咲

愛媛県内の大学生防災士による NPO 団体、防災リーダークラブは、松山市と愛媛大学が連携して進めている全世代型防災教育の中で設立され、行政と地域が協力し合い「防災・減災」を目指した防災普及活動を行っている。

私たちは、主に、地域での防災活動、授業での防災教育活動、啓発イベントの3つの活動をしている。まず、地域防災では、災害時の地域に起こる危険や対応する行動について考え、一緒に訓練をすることで、住民への啓発や防災に関する意識を高めることを目的に活動している。地域で活動する中で、様々な年齢層の方と繋がることができ、立場の違いや過去の経験談を知ることで、大学生では知り得ないことを知ることができている。次に、防災教育では、自作の動画を使った ×クイズや防災クッキング、グッズ作り、シュミレーションの体験などを行った。ゲームや競技形式にするなど親しみやすく学んでもらう工夫をしながら、子ども達自身の知識や技術の習得、防災意識の向上や啓発、家族への波及を目的に活動している。大学生の専門性を生かし、子ども達の学びを引き出すワークショップを目指している。最後に、啓発活動では、松山市と協働して地域のイベントに参加しながら、住民へ防災意識向上のための活動をしている。例えば、外国の方との交流では、災害時に適切な対応が取れるよう促す取組として、ジェスチャーを活用してコミュニケーションを図る活動をした。

このような活動を行い、発足から7年目に突入したが、近年はコロナによって活動やイベントが減少するという課題に直面した。これにより、大学内外での活動の多くが制限され、大学生自身は活動に参加できないジレンマや不安を抱えた。また、団体としては知識の後継者不足に繋がった。そこで、まずオンラインでの活動に取り組んだ。依頼を受けた学校に防災教育に関する動画を送り、見てもらった。また、知識不足を補うために、オンラインミーティングや研修を行った。さらに、Youtube 防災動画プロジェクトとして、子どもの防災の入り口になるような「めざせ！防災士クイズ」や

— YouTube防災動画プロジェクト —

**「めざせ！防災士クイズ」** (全4回)

- 災害や防災の知識をクイズにして発信する
- クイズで気軽に防災力を高めることができる
- 子どもの防災の入り口になる

**「災害碑巡り」** (全6回)

- 松山市内の災害碑を巡り、その歴史を発信する
- 身近な災害の歴史を松山市民の方々に知ってもらう
- 災害への備えを見直してもらう



災害への備えを見直してもらうための「災害碑巡り」といった動画を配信した。また、SNS を活用し、活動の様子やメンバーの感想を Facebook や Twitter で拡散し、活動が少なくても防災リーダークラブを知ってもらう機会を増やそうと思っている。

活動を行ってきて感じたことは、一つ目は、防災は難しくないということだ。堅苦しいイメージを持たれがちな防災だが、私たちの取組を通して市民の生活に溶け込んだ防災ができたらいいなと思っている。二つ目は、多様な方々との交流を繋げていきたいということだ。教育や地域といった繋がりが多くなっているため、今後は防災を通して、障がい者の方や県外の方とも繋がっていききたい。

## 【質疑応答】

< 寺家田んぼ“ むすび” >

Q 歯医者をされている大熊さんがなぜこのような活動を始めようと思ったのか？これまでの経験や背景を踏まえて教えてほしい。

A 最初は、有病者の方が安心して食事をするのでできる大人食堂に関わっていた。それがきっかけでコミュニティが広がり、地域の引きこもりの子どもが参加していた田んぼの活動を NPO 法人から受け継いだ形となる。

Q 大熊さんが引き継いでから大変だったこととやりがいに感じたことは？

A お米が子どもたちの口に入る最後まで責任をもつ必要があることや農作業を休日だけでこなしていくことが大変。子どもたちの笑顔がやりがいとなっている。

感 神奈川でこの活動をするのは大変すごいことだと思う。愛媛でも使われていない農地がたくさんあるので、こういう活動が広がっていけばいいなと思った。

感 「思い思いに…」という言葉がたくさん出てきたことが気になっている。子ども達が自由に描いたり作ったりしていることが素晴らしいと思った。コロナ禍で様々な制限がある中、子ども達の主体性や感性などが高まっていいなと思った。お話を聞く前は、どうして差別や偏見を無くすために田んぼを選んだのか不思議だったけど、田んぼの中には障壁がないという世界があって、それが外の世界にも繋がってほしいという言葉に心を打たれた。私も他の場所でやってみたいと思った。

感 歯科医から「食べる」ことに繋がり、食堂の活動、田んぼへと繋がっていることが印象的だった。

Q 活動の参加者が増えているが、どのように人の繋がりを作っていったのか？

A 無償であることと SNS での告知、人が人を呼んでいるおかげだと思う。様々な多様性を持つ子が参加できるということに魅力を感じてもらっており、来やすさもあるのだと思う。

感 人づてに繋がっていったのがいいと思った。

感 「居場所作り」という言葉が印象的だった。私は、将来養護教諭になりたいと思っており、学校の中での居場所になったらいいなと思っている。この活動は、学校とは異なり、子どもも大人も様々な背景を持つ方も集まる場所で素敵だと思った。田植えを通して学びがあるのもいいなと思った。

Q アートと田んぼは、沸々と湧いてきたイメージなのか？

A みんなが得意とするものが残ってきた。

<防災リーダークラブ>

Q 小中学校が防災リーダークラブに防災教育をお願いするとき、どのように申し込めばよいのか？

A 松山市防災危機管理課や松山防災リーダー助成センターに申し出てもらうと、防災リーダークラブに依頼がくるようになっている。

Q この防災教育をお願いしたとき、どんな教科に入るのか？

A 総合的な学習の時間が多い。

Q 活動していて大変だったことや苦労したことは？

A 若者が出てくることを嫌がる人がいるのではないかという不安があった。ただ、地域を守りたいという思いを持って取り組んでいる。

Q 児童クラブに携わっているのだが、防災に関して子ども達に学ばせるときのアドバイスがあれば教えてほしい。

A 動画を見せたり、実物を見せたりして実感を持たせる。座学より体験重視にして話し過ぎず、体を動かして学ばせるようにするといいと思う。私たちも楽しく、分かりやすく学べるようにしている。

感 人間は、イメージするより体験した方が記憶に残りやすいけれど、災害は体験するのが怖い。来たら怖いということを体感させるのは難しいなと思った。

感 私も小中学生を東北の被災地に連れて行って現地の方の話を聞かせたことがある。子ども達の中には、気分が悪くなる子どももいた。コロナ禍が終わったら、実際に現地に行って見るということが大切だと思った。

感 私も防災リーダークラブの一人で、外国の方に防災について指導する機会があったが、日本人にとって当たり前なことが外国人にとっては当たり前ではないことを知った。地震はなじみのない災害で、実際に被害があったときにどうすればよいのか分かっていない人が多く、防災マップの見方も知らなかった。この経験から、多様な方に丁寧に伝えることが大切だということを感じていて、いい経験をさせてもらっている。

感 僕自身も参加したいと思った。防災は、とても大切なことなので、今後も頑張ってもらいたい。

感 身の回りの物を使って手当を学んでおくことは、実際に災害が起きたときに役立つのでいい学びだと思った。

感 私の勤務している学校で防災リーダークラブの方が活動してくれている。子どもたちは、飽きることなく活動していて、おすすめだと思う。

Q どういった思いでこのような活動に参加され、将来はどのようなイメージをされているのか？

A 私の出身地は、南海トラフ大地震が来ると想定された地区であり、小中学生の頃から「自分の命は自分で守る」ように教えられてきた。しかし、その当時はあまりイメージができなかった。高校生になり、東北の被災地に出向く機会があったが、8年経っていても何もならないような更地状態を目の当たりにし、自分の出身地もこうなるのだと思った。そこで初めて実感できた。そこから、防災の道を選ぶため、愛媛大学に来た。将来はふるさとに戻り、地元を守るための防災や町づくりをしたいと思っている。

### <全体を通しての感想等>

この2つの事例を聞き、どちらも多様性がキーワードだったように思う。人と繋がっていれば、何かが起こったときにすごい力になると感じた。メインは、人で、いろいろな特性を持った人が当たり前のようにやって来て、当たり前のように繋がって助け合うことが大事だなと思った。



# 第9 分散会

ファシリテーター 森脇 和夫  
分散会記録者 時本 真弥

## 体験活動を通じた子どもたちの成長

名寄市教育委員会 発表者 佐々木 憲一

名寄市は旧名寄市と旧風連町が合併した街である。名寄市では、「へっちゃLAND」と「わくわく！体験交流会」の二つの取組が行われている。

「へっちゃLAND」は開始当初、7日間の宿泊やキャンプの中で牛の乳しぼりや芋掘りなどの体験活動を行っていた。「へっちゃLAND」の名称には、「なんでもできる、一人でも平気、へっちゃらだ！」をモットーに活動するという思いが込められている。今年度はコロナ禍の影響もあり、3年ぶりに2泊3日の日程で、班ごとの調理体験や九度山登山、釣り体験やわらじづくり体験などを行った。

「わくわく！体験交流会」は子ども会のリーダー研修会の流れを汲んだ活動である。令和4年度は年間通して全7回の実施を計画している。班ごとの調理体験や青少年研修施設での焼き板づくり体験、森林散策で木の直径を計測し木の高さを推計する活動や、北海道独自の百人一首体験などを行った。今後も、クリスマス料理作りやカーリング体験、ワカサギ釣り体験等を実施する予定である。

体験活動では子ども達が様々な場面で成長していく。班ごとで行う活動においては役割分担をして協力することで協調性や各自の積極性などが養われる。また、新しい体験を積み重ねることで何にでも挑戦する心が育っている。様々な体験を行うことで子ども達の自己肯定感が育ち、成長している姿が見られている。

あらたなコミュニティのカタチ。

あらたなつながりのハジマリ。

えひめ地域こども食堂ネットワーク 発表者 難波江 任

こども食堂とは、もともとは東京の八百屋さんが名付け、子どもが一人でも行けて、無料や廉価で



食事ができる食堂として始めたのがはじまりである。

近年は、地域食堂、みんな食堂という名称のところもある。子どもだけでなく、地域の人も来ることができるような形になっている。地域発の自主的・自発的な取組として行われている。

えひめ地域こども食堂ネットワークは 2020 年に愛媛のこども食堂セミナーの中で、「コロナ禍も進む中、こども食堂のネットワークがあるといいね」という意見があって創設された。愛媛県内の 101 ヶ所で活動している。

現在、こども食堂が実施されているのは、県内の小学校 281 校中 73 件で、充足率は 26.0% である。一つの小学校区の中で子ども達が一人で通えるこども食堂がどれだけあるかという視点で考えると、まだまだ足りないところもある。

高齢者施設を用いて活動するところもあれば、お弁当を配るという形でこども食堂を運営するところもある。中には、食材について説明するなど工夫をして食育につなげる活動も見られる。

こども食堂をどうやって運営をしていくのが苦勞するところをどう改善していくか、そのような悩みや活動の情報共有を行う場として、セミナーを毎年実施している。こども食堂の開催には月一回当たり 2 万円～3 万円かかる。開催のためいろいろな工夫はされているが、資金不足やスタッフ不足が課題として挙げられる。こども食堂間の交流を行うことで、これらの課題の解決を図っている。

## 1 こども食堂間の交流促進

愛媛県内では、こども食堂の地域ネットワークは現在、宇和島地域、東予地域など一部のネットワークが形成され、情報交換や相互支援の場の形成がされています。とはいえ、ほとんどのこども食堂が単独で苦勞されながら運営しているのが現状だと思います。このため、こども食堂同士が交流できる場を提供し、情報交換することで運営上の課題解決や連携による相互支援ができるようにしたいと考えています。具体的には、年に 1 回～2 回、情報交換と運営ノウハウを学ぶためのセミナー開催や交流会を開催します。

これまでのセミナーの様子

第 2 回 愛媛のこども食堂セミナー  
日時： 2020年2月22日（土）  
13:00～16:00  
場所： 松山市青少年センターホール

第 1 回 愛媛のこども食堂セミナー  
日時： 2019年2月23日（土）  
13:00～16:00  
場所： 愛媛県男女共同参画センター  
多目的ホール



## こども食堂とは

「こども食堂」は、2012年、東京都大田区にある八百屋さん「きまぐれ八百屋だんだん」の女将さん、近藤博子さんがつけたのが最初のネーミング。子どもが一人でも行けて、無料や廉価で食事ができる食堂として始めたのが、こども食堂のはじまりです。（決して子どもの貧困対策のみが趣旨ではありませんでした）



## 【質疑応答】

< 体験活動を通じた子どもの成長 >

Q ヘッチャ LAND について、コロナ禍の影響できない年もあったと思うが、なぜ続けようと思ったのか。

A この事業に参加したいと思う子ども達がいる。いろいろな体験をして成長することが将来における子ども達にとって意義のあることだと思っている。したがって、辞めるではなく継続するという形を取っている。

Q 合併前の取組の中に東京都杉並区との交流があった。私自身、東京では地域のつながりが薄れていると感じている。体験活動の難しさもあると思うのだが、都会との交流をどのように行って

いたのか。

A 始めは東京の子どもが風連町に来て自然体験するという形だった。冬に開催してスキーの体験をするようになったのが始まりである。それ以降は夏も含めて交流会という形にした。始まったきっかけとしては、東京は自然がないということで、北海道の自然を体験したいということだった。キャンプを行い、山での虫採りや手作りいかだでの川下り等の活動も行った。逆に、こちらの子供達は都会の様子が分からないので、東京に行って都会の雰囲気を経験するという活動を行った。ディズニーランド研修等を行うことで、お互いの足りないところを補い合うような形で実施していた。

Q 30名の募集をどのように行ったのか。

A 小学校から中学校までチラシを配布した。ホームページや地元の新聞にも掲載し、電話での申し込みを行った。今年は人数が多かったので抽選を行った。

<あらたなコミュニティのカタチ。あらたなつながりのハジマリ。>

Q こども食堂は広い地域で行われているが、どのような場所や人が始めるのか。

A 企業が始めることもあるが、一番多いのは地域の人たちが始めている。地域の方々が地域のために行おうという形で始まっている印象がある。近年はいろんな縁が希薄になってしまっている。人と人のつながりができにくくなり、コミュニティも小さくなっていく。それを何とかしないといけないということでこども食堂を始める人が多い。また、子どもの学習支援とその後の食事の面倒をみたいという経緯や、地域の中に食べることができない子どもがいるという話を聞いたという理由から始まることもある。地域で困りごとを抱える人や家庭を支えようという思いをもって始める方々もいる。場所としては、公民館や施設、お店を用いる等、いろいろある。

Q こども食堂というと貧困対策というイメージがあったが.....。

A もっと広く捉えてもらえるといいと思う。知らない人を助けるのは難しい。でも、知っている人と助け合える。そのようなコミュニティを広げ、つながりを増やす意味もあるし、地域と関わることで文化や伝統の継承が行われるということもよさとしてある。

感 貧困というと経済的貧困を挙げることが多いが、ここでは社会的貧困と考え、社会的なつながりを解決するという捉え方でもいいと思う。

### <全体を通しての意見感想等>

Q こども食堂をやりたいという話が出てもなかなか話が進まない。どういった声掛けで話が進んでいくのか。

A 「やります」という声掛けを SNS で行ったり近隣の学校にチラシを持って行ったりする。定期的に行けるようになると SNS や常連さんができて、そのつながりから広がっていく。

Q そのときのキャッチコピーのようなものは何かあるのか。

A 最近は「気軽に一緒に食べるとおいしいね～」のような形で行っている。

Q アレルギー対策はどのようにしているのか。

A 最初に「アレルギー対策していません」と提示したり、メニューを掲示したりしている。

Q 体験活動に関して、これをやろうというのは誰がどのように決めているのか。また、わらじ作り等は専門家のような人が必要だと思うが、どのように探しているのか。

A やることに関しては、担当主幹が大枠を作った中で決めていく。森林散策等は専門家に許可や指導を得ながら行っている。わらじ作りは参考書にあるものを職員が理解して教えている。

Q 体験活動に関して、継続して参加している子どもはいるか。

A 継続している人もいれば、2つの活動にどちらも参加している子どももいる。へっちゃ LAND に関しては長年参加してくれた高校生がボランティアとして補助に入ってくれるということもある。

Q 社会教育に興味のある若者へ、次へのアドバイスはあるか。

A 佐々木さん：若い皆さんはいろんなことに興味があると思う。いろんなことに挑戦してみるのが大切である。できないかもしれないより、やってみてできなかったという反省が次につながると思う。失敗を恐れず、チャレンジしてほしい。

難波江さん：NPO の活動の中で他の活動を模索していけたらいいのではないか。情報も大切だけど、実際に自分で見て体験するのも必要である。遠隔で映像を見ることもできるけど、肌感というところで実際に経験し、感じてみるといいと思う。

感 社会教育と福祉が繋がっているいろいろな活動ができればいいと思う。

感 教育委員会としてこれだけの活動をしているのは初めて聞いた。こども食堂なども野外でやってみるといいのかもしれないなと感じた。

Q 私たち尾道寺子屋も3年ぶりに一つの行事を達成できた。コロナ禍との共生はどうされていたのか。

A へっちゃ LAND の方はコロナの影響で5、6人が参加できなくなったこともあった。参加する前にキットを配布して陰性ということを示してから参加してもらうことも大切だろうと思った。また、宿泊が伴う場合も個人の希望で日帰りもできるようにしてもいいかもしれない。

Q こども食堂について、保護者が子どもに食べさせてあげられないという負い目を感じることもあると思うが、保護者とどのように関わっていくのか。

A 保護者とのやり取りは多い。今日は来られないからお弁当を後で取りに行くというようなやり取りもあれば、悩み相談を受けることもある。コミュニティとして捉えている人が多いという印象である。ただ、手を挙げられない人もいると思うので、そのような人たちが参加しやすい雰囲気づくりを意識している。誰かが負い目を感じるようにはしたくないということの一つの課題として話し合っている。

Q 親と食べることも可能か。保護者同士の交流もあるのか。

A もちろんある。保護者の人たちも一緒に食べる場になっている。

Q こども食堂に関して、3回のセミナーでネットワークができたようだが、決め手となったものやその時の思いを教えてほしい。

A 話し合った時に、資金、スタッフ、場所の問題がよくあがる。場所は仕方ない面もあるが、資金やスタッフ的なものはネットワークがあると助け合えるし、声を上げていくこともできる。

Q ソロキャンプに関して、泣いてしまったり眠れなかったりする子はいたか。

A 交流会に関しては兄弟で泊まることもあるが、へっちゃ LAND は一人でずっと泣いてしまい、日帰りになる子もいた。しかし、家から通ってすべてのメニューをこなしていた。

# 第 10 分散会

ファシリテーター 水野 浩司

分散会記録者 都合 美帆

## 未来応援コミュニティb-room ぐるーむ ～ 高校生のためのサードプレイス～

未来応援コミュニティb-room 発表者 佐野 淳子

未来応援コミュニティb-roomとは、「家庭でもない学校でもない第3の居場所として高校生が安心して過ごせる居場所」として高校生のためのサードプレイスである。大分県坂ノ市を拠点として放課後に気軽に立ち寄れる場所づくりに取り組んでいる。土日祝祭日は高校生のボランティア活動、高校生向けの講座・体験活動などを行い、b-roomの活動を通して地域との交流を目指している。地域内にある県立高校と連携し、高校生が地域で活躍できる機会をコーディネートしている。

今後は、地域が高校生の輝ける場所に、また高校生が地域をもっと元気にできるように、地域と企業との連携を目指し、高校生が主体性を持った活動につなげてく予定である。



## (株) サン・クレア ～ 宇和島オリエンタルホテル～

(株) サン・クレア 発表者 清水 裕太

地方都市の課題や魅力を地元の方に伝えるために「ORIENTAL MARKET」というマルシェを開催。宇和島市で活躍されている方と地元の方との交流の場づくりに取り組んでいる。第1回目は大盛況であったが目的としていた若者の姿はあまり見られなかった。

そこで、地元を離れることが悪いことではなく、地元に戻ってきて地域のために何かしたいなと思えるようにし

【宇和島オリエンタルホテル】地方（宇和島市）：加賀の森集合

### 地方都市課題

地域別	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期
宇和島市	170	248	198	237	181	164	124	122	117	111
宇和島市(宇和島市)	180	245	195	235	180	163	123	121	116	110

四国エリアは全国で見ても地元依存割合が低い。

そして何より  
「行先への期待」

その土地、人に馴染み。  
大切にしていることに事に寄り添い。  
新たな物を一緒に作っていく

継続できる仕組みをつくり。  
単に最先端の技術ではなく、  
街と共存し持続できるもの。

外から来た私たちにしか見えない物もきっとある。  
そんな事を大切にまち作りに挑戦しています。




たいと思い、第2回は学生参加型のマルシェを開催。高校生たちが宇和島産のブラッドオレンジを使ったお菓子の販売を通して、地元の方との交流の場になった。

今後は、地域を巻き込んだイベントを開催し、地域とともにイベントを育ていくことを目指している。現在は、松野町目黒で藍染の体験や米作り体験、自然体験活動を行っている。地域の魅力を発信するための新たな取組に挑戦していきたい。

## 【質疑応答】

未来応援コミュニティーb-room

Q 高校生の募集の仕方はどのようにしているのか？

A 登録制ではない。放課後自由に使えるスペースとして提供している。ボランティアや体験活動、講座については、その都度募集をかけている。学校とのつながりがあるのでチラシを配布している。SNSの発信で参加している高校生も多くいる。

Q 子供食堂を運営しているが、高校に訪問し、協力をお願いした際「市を通していただかないと」と断られた。学校側のボランティアの受け入れのハードルを感じることはあるか？

A ハードルはある。アンケートを依頼したが断られたことも。何度も足を運んで顔を知ってもらい、活動後は報告書を持っていき信頼関係を築いていった。生徒さんの安全を守ることを第一に考えていることを伝え続けている。

(株)サン・クレア

Q 新しいことを始めるにあたって苦労したことは？

A 始まってしまえば勢いでいけるが、始まる前はホテルがマルシェをする意味について不信がられた。飲食店に連絡しても幾度となく断られた。その中でも自分たちがしたいことを伝え続けることで協力してくれる人も増えた。新しいものへの抵抗があるが、諦めず伝え続けることが大切。

Q 宇和島を盛り上げてくれてありがたい。オリエンタルホテルでマルシェはまだ続いているのか。森の国のイベントでの高校生との関わりはどのようにしているのか。

A 第3回マルシェを企画していきたいと思っている。松野町での高校生との関わりについては、松野町に高校はないが、松野イズム高校の生徒さん達がいる。廃校をベースにオリエンテーリングを企画している。今後も学生たちを巻き込んだ活動を広げていく予定。

## 全体を通しての意見感想等

未来応援コミュニティーb-room

Q ボランティアに参加している高校生の変容は？

A 部活動に所属している高校生の割合が減っている。5年間で激減している。選択肢がたくさんあるのかな。めんどくさそうにする高校生も多い。でも最終、自分から行動できる高校生が増えているのが目に見えて分かる。

Q 生徒が自分事としてとらえていることは素晴らしいこと。子供発信でやっていることはあるか？

A 主体性を持った行動を進めている。場所の提供や事業の内容を知ってもらうところに重きを置

いている。現在、「スポーツ鬼ごっこ」というイベントを企画している。企画は高校生、参加者は小学生。企画の中で役割分担も口をはさんでしまうこともあるが、高校生の行動を見守ることで高校生の主体性を伸ばすことを目指している。

Q 自分たちだけだと限界がある。b-roomさんの居場所があるのはいい。第3の居場所は自分で作れるということは具体的にどういうことなのか？

A 活動しながら感じていることは、第3の居場所はコミュニティであること。第3の居場所は、自分の気持ちの持ち方や関わる人や環境で作れる。高校生が社会に出たとき自分たちでコミュニティを作れるようにb-roomを練習の場にしてほしいと思っている。

(株)サン・クレア

Q 地域の方の変容を感じることもありますか。

A 地域の方が注目することが増えてきた。次やらないの？と興味を持っていただける人が増えてきた。子連れの参加者が増えている。

Q サン・クレアの企画するバックアップ体制や会社としての応援体制はあるのか？

A 地方創生に力を入れている会社であり、宇和島でホテルを運営しているが、それを地域にどう還元していくのかを考えることがベースになっている。スタッフが企画のプレゼンを行っている。目先の利益よりも未来の投資に対して会社はとて応援してくれる。

Q 地域おこしの活動をされているが、清水さんの地元に対する思いや変化はあるのか。

A 地元を離れることで地元の良さを知ることができる。宇和島や松野町に来たからこそ分かる部分があり、別の視点で見ることができる。そこで感じたことを地元の子どもたちに発信していけたらいいと感じている。

感 企画イベントはヒットしてなんぼ。ヒットする仕組みは大切。募集要項をQRコード化することで参加者が増えた。今の募集の仕方が昔と変わった。今後も新しいツールを考えていきたい。

感 イベントを企画する上で「非日常」がキーワードになるのではないかと考えている。NPOおのみち寺子屋では夏休みに100km歩く体験活動を行っている。冬休みや春休みには学習と体験を掛け合わせたイベントを企画。子どもがちょっと頑張ればできる体験を大人は手を貸すのではなく見守り、子たちだけでやらしめることが大切。そのような体験の企画を考え、非日常を体験することで子どもたちのワクワクにつながる。コロナを言い訳にしているは何もできなくなる。そんな状況でも何か企画ができないかと考える必要があるのではないかと。

感 佐藤さんの活動は新しい。高校生が主体的に学べる機会があるのは素敵。

感 地元を離れることは悪いことではない。帰ってきたいと思える地元を作っていきたい。という言葉が印象に残った。

感 周知の仕方について、企画の動画をYouTubeで配信したが閲覧してくれた人が少なかった。でも方法としては選択肢の一つにあるのではないかと。ワクワクするような実践は、地域の学び舎で企画したドローン教室は大人気。子どもたちもワクワクする。

# 第 11 分散会

ファシリテーター 森分 洋樹  
分散会記録者 井上 省吾

## 島根県益田市発！社会教育コーディネーターが学校教育 & 地域教育を変える！

益田市教育委員会 発表者 大畑 信幸

益田市では平成 28 年に初めてコミュニティ・スクールを導入した。市内の各学校区には、公民館が主体となり「つろうて子育て協議会」という学校外で子どもたちに活動を行う場を提供するネットワークが作られている。そのネットワークを用いて学校外の活動を行なっている地域がコミュニティ・スクールを導入することができる。学校運営協議会のメンバーも協議会から推薦を受けるといった規則を作っている。

コミュニティ・スクールの導入に伴い、社会教育コーディネーターも同時に配置した。学校外の子どもたちの活動を充実させても、その活動が学校と地域の間で伝わりにくく、連携を図るのが難しいときがあった。地域と学校、それぞれやっていることを伝え合い、お互いをつなぐ役割を持つ「翻訳家」としての役割として、社会教育コーディネーターは存在している。社会教育コーディネーターは通常職員室で活動し、公民館をカウンターパートとして、学校の子どもたちを公民館等で行われている活動に巻き込んでいる。子どもたちが楽しいと思える活動を提供することにより、益田市では小学校だけでなく中学校においても、校外の活動を積極的に参加している子どもたちが多く、校外の教育活動が活性化することにより、学校内の総合的な学習の時間などの教育活動も充実してきている。

来年度、新たに2つの学校でコミュニティ・スクールが導入され、市内 15 の小学校のうち、6 つの学校がコミュニティ・スクールとなる。個人事業主である社会教育コーディネーターの生活を安定させるため、今後法人の立ち上げを検討している。

▶ 匹見・戸田・豊川の取り組み「子ども×〇〇」



### ★子ども・大人の変容と新たなチャレンジ



# 松山市子ども健全育成事業 土曜塾

松山市青少年育成市民会議 発表者 西川 暁

平成 16 年に松山市子ども育成条例が制定され、その「社会全体で子どもたちを守り育てる」という理念を具現化するため、平成 18 年に松山市青少年育成市民会議が設立された。行政や市民団体、学校、家庭などが連携を促進するという目的から、松山市内の様々な社会教育団体で構成されている。

「土曜塾」は松山市の委託事業の一つであり、平成 24 年度から開始された。貧困の負の連鎖を断ち切るために、家庭環境と学習習慣改善への包括支援を行っている。当初は対象を生活保護受給・非課税世帯対象としていたが、現在はひとり親世帯、児童扶養手当支給世帯、コロナウイルスによる減収世帯にも対象を広げている。

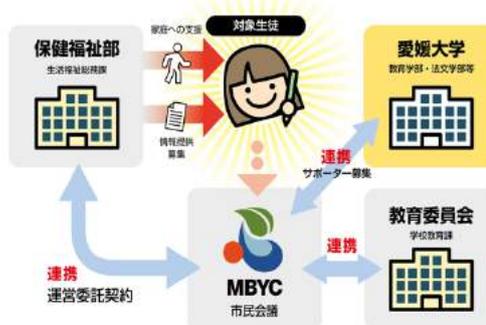
現在は市内に3つの教室が開講され、総勢 100 名を超える中学生が教室で学んでいる。運営を通して子どもたちに学習の場の提供だけでなく、子どもたちの居場所づくりも目指している。

各教室の運営は大学生が中心となって行っており、中学生への学習支援や運営主体としてのマネジメント業務を通して、大学生の社会性の向上も期待している。各教室での学習指導が終わると、運営スタッフのみで運営会議を行い、当日の振り返りや情報共有を行なっている。

土曜塾の運営以外にも、英語カフェの運営やキャンプギアの無料レンタル、小中学校の連絡網や防災で使えるアプリの運営などを行い、青少年育成のために地域全体から働きかけている。



土曜塾 縦割り行政や関係団体とを結ぶ“HUB”としての役割



## 【質疑応答】

< 益田市教育委員会 >

Q 地域おこし協力隊と社会教育コーディネーターとの違いは何か。

A 社会教育コーディネーターの条件として教員免許状の取得がある。総務省の地域おこし協力隊の弱点として報酬が安い点（年間 250 万円程度）が挙げられるが、社会教育コーディネーターは内閣府の地方創生推進交付金を用いて、年間 360 万円程度の報酬がある。また、地域おこし協力隊は 3 年任期で任期後の定住を目的としているが、社会教育コーディネーターは定住を求めている。益田市での経験を活かして、ステップアップの機会にしてもらいたいと考えている。

Q どうやって人材を募集しているのか。

A 紹介や口コミで応募してくる人が多い。公募をかけるとどんな人材が応募してくるかわからない。何度も益田市に来てもらって話し合いを行い、活動を十分に理解してもらった上で応募してもらっている。

Q 大畑さんの元々の仕事は何か。

A 元々は学校の教員で小学校と中学校の教員として18年、社会教育で20年の経験がある。

Q どうして益田市の社会教育コーディネーターに応募したのか。

A そのまま先生になってしまうと地域との人間関係づくりがなかなかできないが、社会教育コーディネーターは活動を通して、なぜ地域の人と連携をすべきかを理解できる。もともと益田市出身で、高校生のときに益田市が行うライフキャリア教育に活動に参加した。学校の中では勉強と部活動だけになりがちなところに、地域の子どものことを真剣に考える大人たちに触れ、学校以外のところでも人を育てていく場を作りたいという思いが出てきた。大学進学後も大畑さんとの繋がりがあり、現在、社会教育コーディネーターとして働いている。大学院進学も考えたが、社会教育コーディネーターの方が実践的な学びがあると思う。

Q 現在の県外出身の方が社会教育コーディネーターに応募した動機は分かるか。

A 最初の人は地域教育に興味があり学生時代に島根県内で研究を行っていた。そこで活動している関係者から益田市を紹介され、応募してくれた。別の人は「一般社団法人ゆたラボ」の立ち上げを行う際に、県外の教育イベントで益田市の取組を宣伝したところ、興味をもち益田市に来てくれた。コーディネーターの中で話していると、学校の中に入ってつながりを生めることが、益田市のコーディネーターを選択した決め手となったと話している。

Q 「ゆたラボ」に教えてもらいたい。

A 3年前に一般社団法人を立ち上げ、高校生の地域での活動を支援するために、公民館を中心に高校生の語り場やサードプレイスの運営などの活動を行なっている。

#### <松山市子ども健全育成事業>

Q 青少年センター英語カフェと土曜塾との連携は行なっているか。

A 学習指導には直接関わっていないが、レクリエーション活動の一つとして英語カフェのスタッフに協力してもらいながら英会話などは行なうこともある。

Q 青少年センターは松山市在住者だけ利用できるのか。

A 基本、松山市民を対象としている。

Q 厚生労働省の新しい補助金を申請する予定はあるか。

A 勉強不足なので今後考えたいと思う。

感 P T A 役員が社会教育を行うことにインパクトがある。地域が入ることで教育と福祉が結びつき、連携が進んでいるところが素晴らしい。

Q 支援を必要としている家庭や子どもへのアプローチはどうしているのか。自分のところでは、なかなか情報が行き渡らないことが多い。

A デリケートな情報のため、行政が民間団体に情報を出すのはハードルが高い。そのため、行政の生活福祉課や子育て支援課から必要と考えられる家庭に直接情報提供し、そこで参加を希望する人に対して案内をしている。今後は持続的に来てもらうことが今後の課題である。

感 教育と福祉の連携が難しいという課題がある。益田市では、情報共有を円滑に行うために、福

社部局と協定を結び市長をトップとしたコンソーシアムとして行うことで、学校や民間、行政と連携がうまくいき、必要とされる家庭に支援が行き届くようになった。

**<全体を通しての意見感想等>**

現在所属している団体でも、子どもたちに良い教育の場を提供することや大学生の経験値を上げていくことに課題がある。本日聞いたことを持ち帰って今後の活動に役立てたい。

人と人との関わりやつながりが大切だと感じたため、今後の活動にそういった場を作っていきたい。

具体的な活動事例を聞くことで自分の視野を広げることができた。

# 第12分散会

ファシリテーター 柴崎 あい  
分散会記録者 高田 愛子

## コーヒーハウス

### (しょうがいしゃ青年教室・喫茶わいがや)の活動

国立市公民館 発表者 井口 啓太郎

国立市公民館で行っているコーヒーハウスの活動について紹介する。国立市は東京都内で二番目に小さな町である。国立市公民館は、市内に一館のみのやや大型の公民館である。中には「喫茶わいがや」という喫茶店があり、図書室やロビーなども備えた、個人でも関わりやすいつくりになっている。

公民館には、学習者が学んでいる間に子どもを預かる保育室という施設もある。国立市公民館にはさまざまななかたちでこども・若者に関わる事業がある。一つは、中高生のための学習支援「LABO くにスタ」である。勉強についていけない中学生のために、大学生が一对一や二対一で学習支援や居場所づくりの活動を行う。ここで意識しているのはナナメの関係づくり。どうしても学校では横のつながりが強くなるために、ここでは友達や教師とではない、大学生と子どもとのナナメの関係を大事にしている。二つ目は、「喫茶わいがや」というコーヒーハウスの取組。ここは障害がある人もない人も一緒に働く、活動をする場

になっている。コーヒーハウスで関わる人々は知的障がい者を主とする障害者手帳を持っている方々、高校生から40代くらいのボランティアスタッフ、公民館職員。最近では学習支援に関わった中高生が成長してコーヒーハウスにも携わるといった循環も生まれている。

活動としては、「しょうがいしゃ青年教室」と呼ばれる事業がある。この事業は、障がいのある人たちが公民館の活動に参加できる場を作ろう、というところから始まった。六つのコースに分かれて、スポーツや料理、クラフト、喫茶店実習、YYW(みんなで話し合いをしてやりたいことを実現していく)などの活動があり、障害者手帳を持つ約60名弱が登録して各活動に参加している。「喫茶わいがや」は、「障害をこえてともに自立する会」という市民団体が運営しており、ボランティアが有償で行っている活動になる。

こうした国立市公民館の活動には歴史があり、元々は勤労青年の青年学級から発展したものであった。コーヒーを飲みながら話す場だったところに、障がいのある人たちが関わるようになり、近年では、障がいの有無に関わらず不登校、引きこもりなど様々な状況の若者が参加する場になっている。

「0から1よりも9から10へ」。新しい取組を1から始めるよりも、今それぞれがやっている実践の中

#### 喫茶わいがや

- 市民グループ「障害をこえてともに自立する会」(会員数約120名)が運営。
- 火曜日～日曜日の12～18時で営業。
- スタッフ約20名(学生、会社員、主婦等、10～30歳代中心)が、ローテーションで活動。
- 「しょうがいしゃ青年教室」喫茶実習コースのメンバーが活動。
- 1日の平均売り上げは約6000円。スタッフの平均時給は200～500円程度(=わいが)



#### しょうがいしゃ青年教室

- 国立市内在住・在勤のしょうがいしゃ向けの余暇・文化活動。
- 月1回、平日の夜・土日を中心に活動。
- 6つのコース(スポーツ/クラフト/料理/喫茶実習/リトミック/YYW(やりたいことを企画し、実行する講座))。
- 全体でしょうがいしゃ約60名弱が登録。
- 企画・運営は公民館職員とスタッフ(学生、会社員等)により担われ、スタッフにとっても、障害のあるメンバーと関わる学びの場になっている。



で、地域の中で活動に参加できていない人や、機会を求めているも得られない人たちに目を向けることが、ともに学ぶ、ともに生きることにつながるのではないかと。

## 双海町ジュニアリーダー会の活動

双海町ジュニアリーダー会 発表者 二宮 莉穂・中野 珠里

双海町こども教室とは、地域の魅力を活かした、様々なプログラムを体験することにより、ふるさとを愛するところを持った、心身ともに健全な子どもを育てることを目的とした事業である。

「ふるさと体験塾」、「おもしろ大作戦」、そして「わくわく生活体験夕焼け村」の3本柱で構成されている。現在、実行委員会が中心となり、町内外の有志、学生、学校関係者、保護者等がボランティアとして参加して、「地域のこどもは地域で育てる」を合言葉に活動している。

「ふるさと体験塾」...底引き網体験、サツマイモ掘り、ハイキング、餅つきなど毎年少しずつ内容を変更して実施している。

「おもしろ大作戦」...長期休暇等を利用した単発事業。工作教室などを実施。ふるさと体験塾とは異なり、その都度募集した参加者と共に活動する。

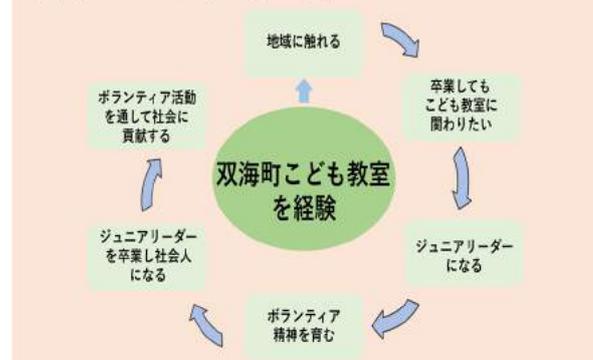
「夕焼け村」...異年齢の子どもたちが1週間の共同生活を行い、学校へ通いながら炊事、洗濯等の日常生活を体験。この体験活動を通じて、家庭や家族の大切さを認識すると共に、共同生活の中で仲間づくりや自主性、協調性、他人を思いやる心を育むことを目指している。

活動に参加して、手伝いたいと思った中学生以上の生徒がジュニアリーダーとなり、双海町こども教室のボランティアスタッフとして33名が年間を通して活動している。自分たちがお世話になったこの活動で、今度は自分たちが運営側に立ち、恩返しをすることを目的に活動している。活動の中で、双海町のために私たちができることはないかと考えるようになった。その中で、旧下灘中学校の校舎を活用できないかという話になり、一か月前から事前に計画し、肝試し大会を行った。当日はすべて自分たちで運営。予想よりも多くの参加者が集まり好評であった。資源が地域に眠っており、有効活用することで活性化できるということが実感できた良い経験となった。ジュニアリーダーとして活動したいと思ってくれる子どもをこれからもっと増やせるように頑張りたい。

### わくわく生活体験夕焼け村



### 双海ジュニアリーダー会



しかし、ジュニアリーダーの活動には課題もある。一つは、プログラムのマンネリ化である。長年続けている事業のため、ベースとなる活動内容が固定化し、似たような活動になる傾向にある。二つ目は、ジュニアリーダー参加の継続化である。現在のジュニアリーダーのうち、全員が次年度以降も活動に参加してくれるわけではない。そのため、ジュニアリーダーがどのような経緯で生まれ、どのような目的で活動していくのかを全員で共有し、一人一人がジュニアリーダーとしての自覚を持つことが重要だと考える。若い活力と学生視点の新たなアイデアで双海町を活性化できるようこれからもジュニアリーダーとして努力していきたい。

## 【質疑応答】

< 国立市公民館 >

Q コーヒーハウスの活動について、コロナ禍で活動は休止していたか。その際、どのように障がいのある方とつながっていたか。

A 障がいを持っている人たちはコロナ禍で一気に活躍の場を失った。福祉事業所などの施設は稼働していたが、障がいのある人たちにとってのサードプレイスの場、コーヒーハウスなどは自粛していた。その際、公民館の活動も休止していた。障がいのある人たちは、コロナの影響を直接的に受けたと思われる。

その際にどのようにつながっていたか。一つは、ラインでのコミュニケーションである。障がいのある人たち、特に軽度の知的障がいを持つ人たちとのラインでのコミュニケーションが、コロナ禍以降活発化した。障がいを持つ方もつながりを求めていたのだと再確認した。もう一つはラジオをやろうという試み。有志の大学生などで「コーヒーハウスラジオ」に取り組んだ。YouTube 配信の場に、質問やメッセージなどはがきを寄せてもらって紹介するという形。YouTube などの媒体の便利さを感じた。視聴者は多くないが、面白い取組であった。

Q 中高生への学習支援について、支援者としての向き合い方を知りたい。学習支援においては、家庭教育が主になるので、あきらめてしまったり、勉強面で答えばかりを求めてしまったりする生徒へのよりよい教え方を知りたい。

A それぞれの施設は役割が異なる。福祉の場、学校教育、社会教育で支援者に求められることや立ち位置が違う。地域の支援者がどんな関わりをしていくかが重要。社会教育で個人がしていくことには限界がある。社会教育において自分にできることは、その人のニーズに寄り添っていくということである。まずは、その人の声を聞き取って寄り添うことが大事。聞き取る際には信頼関係を作っていくことが前提となる。もう一つ大事なことは、ともに学ぶということ。自分は、支援者かつ、ともに学ぶ一員である。その人と一緒に考える、学ぶということや、一緒に学ぶ仲間とつなぐということもできる。これが社会教育の重要な役割だと考えている。

< 双海町ジュニアリーダー会 >

Q ボランティアを通じて地域の子どもたちが地域の魅力を発見し、大人になってボランティアに係るという循環が良いと感じた。ジュニアリーダー参加の継続化における問題点とは何があるか。

A ボランティアリーダーとして行う内容が伝わっていなかったりして、その人たちが思い描いて

いるボランティア像と、こちらが求めている役割とが異なる。最初の段階で、やるべきことをしっかり伝えておくことが大切だと感じる。また、どうしても高校・大学へ進学するタイミングで生活環境も大きく変化するため、活動から離れる生徒も多い。活動に参加したくても町外の学校に通っていて忙しく、離れざるを得ない人もいる。加えて、人数が多くなると一人一人と関わることが難しくなるので、信頼関係を築くことが難しいということもある。年代によるばらつきもある。ただ、ここ数年でボランティアスタッフの数は徐々に増えてきており、先輩ボランティアスタッフの姿を見て、自分もなりたいと感じて加入する人も多い。

### <全体を通しての意見感想等>

- 二つの発表で共通していると感じたことは、若い方が中心となって活動を引っ張っていくというところである。その際、参加する大人の確保が難しい部分があると感じた。企画・運営段階で40～50代の親の世代がどのように関わり、サポートすればよいかを知りたい。

#### A <国立市公民館>

親の世代の参加・組織化は課題である。障害を持つ方の保護者の方々は、親と子の関係が密接であるゆえに、自立を目指す際に親との関係は離し、一人の大人として参加してもらおう、ということに大事にしてきた。しかし、同時に応援や協力、お手伝いなど親のかかわりは重要である。そのため、一年に一回だけ保護者の方と意見交換する懇談会を行っている。ただ、会を組織したり、活動をサポートしてもらったりする段階には至っていない。公民館活動においても40～50代の働き盛り世代の参加は薄く、課題となっている。

#### A <双海町ジュニアリーダー会（担当公民館主事）>

双海も30～50代の活動は停滞している。かつては青年団の活動が活発だったが今はできていない。現役世代の方々の活動を活発にしたいので、話し合っている段階である。ジュニアリーダー+保護者で、保護者同士、ジュニアリーダーと保護者の交流を通して、保護者同士の横のつながりもできたらと考えている。双海町にとっても課題である。

- 双海町ジュニアリーダー会では、ジュニアリーダー主体で肝試しも行ったということであったが、その際大人に頼る機会はあったか。

#### A <双海町ジュニアリーダー会>

以前ジュニアリーダー会で参加していた方々が、運営や受付のサポートをしていただいた。

- 若者がボランティアする際に、若者の主体性に任せるといっても、買い出しに行ったり、軽トラ一つ出したりするのも学生や若者には難しい。その際、頼りになる大人と上手に連携してできたらよい。
- 組織の活動がしっかりしていて、長くあればあるほど、組織としての理念がしっかりする。その分、窮屈さやつらさが生まれたり、楽しさが減ったりしていくこともある。組織としてのあるべき姿がある一方で、多様性を認めることも大事で、そこに共感や共有が生まれる。また、自発性が発揮できる場があることもさらに必要ではないかと思う。その場の力が良い方向に働くこともあるが、逆に働くとしんどい。思いを共有、吐き出す場があると、人を巻き込む新しい力が生

まれる。多様性をどう認めていくかがこれからのテーマなのかもしれない。「来るもの拒まず、去る者追わず」という自由でフランクなスタンスだと、肩の力が抜けるのではないか。

○ 社会教育の場で、あるべき姿と、自由度、多様性を守ることとを両立させる工夫はあるか。

A <国立市公民館>

今日紹介した取り組みは、実際にはゆるい取り組みである。共生という理念を掲げつつも、やっていることは、みんなでご飯を食べたり、コーヒーを飲んだりする活動である。もっと自分たちが面白い・楽しい、と思えるような取組であるとよいのではないか。自分たちの面白い・楽しいと思うことと、地域が元気になっていくこととはつながっていくはずである。

○ 双海のジュニアリーダーとして活動を頑張っている姿に感動した。活動は自分たちにとって楽しいものになっているかどうか。

A <双海町ジュニアリーダー会>

単純に双海が好きで、生まれ育った町が続いて、いつまでも豊かであってほしい、という気持ちで活動に関わらせてもらっている。ただ「双海が好き」という気持ちが芯になっている。

双海が好きで、子どもに関わる仕事をしたいので、今の活動はとても学びになっており、楽しく活動できている。

# 第13 分散会

ファシリテーター 大美 和博  
分散会記録者 幸島 恭輔

## 施設開放事業・子どもの居場所作り「どようひろば」

KSVN（嘉瀬小学校ボランティアネットワーク）どようひろば部 発表者 山下 有希

KSVN誕生の1年前、学校が完全週5日制となった。「どようひろば」は、土曜日の子どもの居場所をつくるために、地域と学校と保護者が同じ思いで手を取り合い、子どもたちの遊び場と体験の場をつくることを目指してスタートした。子どもと大人がつながりをもてるように、地域の子どもの地域で支え育てることを大切にして、大人が子どもと関わる場を増やしてきた。無理なく、「できる人が、できるときに、できることを」をモットーとして、活動を続けてきた。活動を通して、異学年や大人との交流をして地域とかかわることを続けてきた。活動のロゴマークを作成し、活動内容に合わせて地域、学校、保護者の3者が手を取り合い、子どもを見守っていることを表している。発足当時に基金も立ち上げ、地域の思いを実現するために、自治体から活動費をいただいて運営をしている。

土曜日の子どもの居場所づくりを目指して活動を続けてきたが、その思いを継承していくことに以前は課題があった。今後の活動を支える人材を確保することが難しく感じたので、学校のPTA活動として、「どようひろば部」の活動を「ふれあいひろば委員」に位置付けてもらうことで、継続することができ、課題を解決することができた。今は、読み聞かせ、シャボン玉遊び、ヘアアクセサリー作りなど、地域、保護者に支えられて活動が展開されている。

「どようひろば部」の活動は、子どもの居場所であると同時に、大人の居場所にもなっている。高学年の児童やOBの参加により、活動が広がり、つながっていることを感じている。手書きにこだわってチラシを作成したり、年に一回の子どもまつりを開催したりして、工夫を凝らして活動を続けている。

**KSVN いよいよ誕生!**

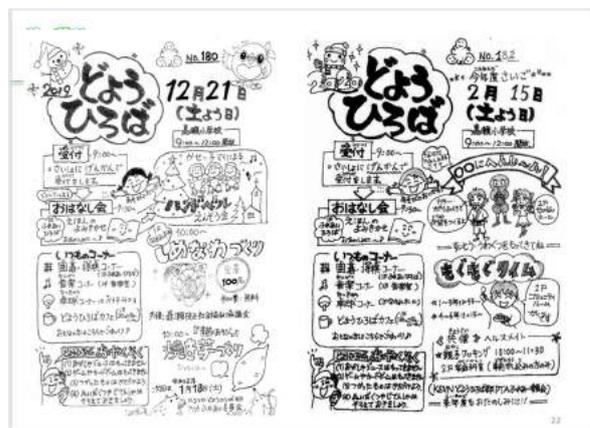
**「どようひろば」を核とした3つの場づくり**

- ①子どもたちの遊び場と体験の場づくり
- ②異学年交流や大人と子ども、大人同士のふれあいの場づくり
- ③更なる学校と地域の良好な関係づくり

教師・保護者・地域 45名の会員(発足当時)

公民館	保護者	学校	地域
学習機会を提供 「誰でもできるボランティア講座」	読み聞かせ 遊びの場の提供 育児サークル	【図書】 地域・保護者・教師への働きかけ 【図書】保護者・子どもへの働きかけ、自由参加	活動資金づくり KSVN基金創設 事務局の機能

**継続を視野に、つながりはじめた嘉瀬町**



# みさこう・せんたんプロジェクト

愛媛県立三崎高等学校 発表者 山内 一輝

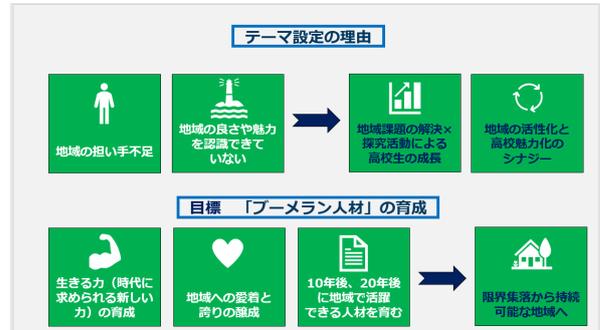
みんなが さいこうに きらきらがやける学校。三崎高校は、人数の少ない田舎の高校だった。四国最西端から最先端の取組ができないかという思いを「せんたん」という言葉に込めて、「みさこう・せんたんプロジェクト」を立ち上げた。三崎地区には、地域の担い手不足、地域の良さや魅力の自覚不足という課題があったので、その地域課題を解決しながら、高校生の成長をねらい、地域の活性化と高校魅力化のシナジーを目指して活動に取り組んできた。地域おこし、地域や学校の活性化を一つのプロジェクトとして「みさこう・せんたんプロジェクト」と呼んでいる。ブーメラン人材の育成を目指して、地域への愛着と誇りを育成し、将来三崎に戻ってくることを大切にしている。

総合的な探究の時間には、3つのテーマに分かれて活動している。みさこうカフェの運営やせんたんミーティングなどの「イベント」、橙を使ったマーマレード作り、裂織りを使ったシュシュなどの製作などの「商品開発」、ブイアートプロジェクト、みさこうアートプロジェクトなどの「情報発信」、それぞれのテーマで地域とつながりながら、その魅力を発信している。

これらの取組が評価され、様々な賞を受賞したり、文部科学省から研究指定校に選ばれたりして、活動を広げている。

様々な取組により、全校生徒が増加した。令和元年度は90名だったのが令和4年度には137名にまで増えている。県外から入学してくる生徒も増え、今は11都府県29名の生徒が寮生活を送っている。進学にも大きな影響を与えており、地域協働活動に積極的に取り組んだ生徒が進路実現を達成している。三崎地域の良さをたくさん体験した生徒がまた三崎地域に戻って来てくれることを期待している。就職した生徒を見ても、出身地での就職割合が高くなっており、地域への愛着が形になっている。出身地域に関係なく、それぞれの生徒が地域課題を自分ごととして主体的に研究に取り組み、積極的に外部人材と連携して活動することで、コミュニケーション能力や企画力の伸長が見られ、学校や地域に愛着をもつことにつながった。

ただ、スケジュールの管理、調整や、全国の仲間たちとの高校卒業後の連携など、いくつか課題も残している。多様な生徒に対応できる個別最適化された学習活動のさらなる推進を目指し、カリキュラムを再構築して、新たな学びのカタチを探っていきたい。



## 【質疑応答、感想】

<施設開放事業・子どもの居場所作り「どようひろば」>

感 週5日制になったとき、子どもの土曜日がどうなるのか心配していたのを覚えている。国の事業として始めるのではなく、地域の力で始めたというところにすばらしさを感じた。有志の活動がPTAの活動につながったのは珍しく、これにより持続されているのがすばらしい。

Q 子どもたちが自分たちで考えて実行している活動はあるのか。

A 保護者の活動がメインなので、子どもの声もよく聞こえてくる。子どもの声を聞いて内容を検討している。ジュニアボランティアスタッフの企画で、内容や当日の運営も含めてお化け屋敷をしたりした。学校の先生方の力も借りて活動している。コロナ禍で、蜜になることが難しいので、広い場所にしたり、絵本を大きく映して読み聞かせをしたりして活動するなど工夫している。

Q 学校の先生と一緒にいるのがすばらしい。学校はどのような役割を担っているのか。

A チラシを配るだけでなく、校内放送をしたり、言葉掛けをしたり、先生が参加したりして、学校と一体となって活動している。

Q 土曜こども広場を立ち上げてPTAで活動したが、学校の協力が得られず、うまくいかなかった。子育てが終わって地域の立場に立ったときにできることを考えて、企画をすると、今度はPTAの協力が得られない。何か秘訣があるのか。

A 20年間保護者として活動していたので、地域や学校とつなぐ役割ができたのも功を奏した。自分がつなぎ目になることで、活動の在り方を考えていくことができた。長く続いていくからこそじわっと広がっていった。組織からではなく、縁をつないでいくことを大切にした。できるときに、できる人が、できることをするのが大切だと感じている。

感 子どもの居場所づくりを中心に、大人、ジュニアボランティアなどたくさんの人を巻き込んでいるのがすごい。地域のいろいろな世代が楽しく活動しているのを感じた。

Q 大人の居場所づくりにも子どもが関わっているのか。

A 大人の居場所カフェは大人が基本的に運営しているが、子どもが覗きに来ることもある。

Q 地域、学校、保護者の関係をつないでいることに感動した。地域の子どもが大人になったときに、次の世代のこどもを見守っていくなどの連続性はあるのか。

A 嘉瀬の街に住んで子育てをしようという思いを持っている大人もいる。ジュニアスタッフでの活動経験が職業選択に影響している人もいる、それが嘉瀬の人口につながればよいと思う。

<みさこう・せんたんプロジェクト>

感 愛媛県内のメディアでも取り上げられているが、こんなにたくさんの取組をしていることに感銘を受けた。

感 地域との密着をこんなに大きい規模で地域の魅力を発信していることが、三崎高校の特色となっているのを感じた。

Q 町外からの生徒は地域の魅力を感じてきているのか。

A 海が好きで三崎に来た生徒もあり、魚の生態を調べたり、海ごみの削減に向けての活動をしたりしている。自分の思いをもって入学してくる生徒がたくさんいる。中学校での学びを生かすために来る学生もいる。三崎高校の活動に興味を持って入学してくれる生徒が多くなっているのを感じている。

感 一人一人が楽しんで発信していることが素敵だと思った。地域とのつながりの上で防災に取り組むなど、様々な取組がなされているところがよい。

Q 大変なこと、よかったことは。

A 定期的なイベントでたくさん声を掛けていただいて、顔見知りが増えていくことがよかった。

A 生徒のスケジュール管理について、様々な活動をしているので、何に力を入れるのかを考えてスケジュール管理するのが大変だった。

A 社会人になったときに役立つことを学んでいる。学びの場が大人になったときに役立つステップになっている。

Q 三崎高校は総合学科ではなく普通科の高校なのか。

A 普通科。普通科として進学も目指す中で地域貢献もできるように取組を検討している。

Q 他校とのつながりはあるのか。

A 関東の高校とつながってディスカッションをしたり、他校主催のサミットに参加したりしている。

感 つながることで客観的に自分のことが見える。新居浜南高校にユネスコ部があるが、はじめは情報発信をしていたが、地域とかかわったり、人に教える喜びを知ったりすることで活動が始まっていった。

感 地域の人と一緒に何かをするのがすばらしい。初めからテーマありきではなく、自分たちの活動の中でテーマができていくのがすばらしい。すばらしい宝が三崎にあることが分かった。きっかけ、環境は大人がつくるかもしれないが、子どもが主体となって活動していることがすばらしい。

Q 地域活動を自分ごととしてとらえることが、様々な取組の広がりにつながっている。地域の人々の声はどのように聞いているのか。

A 本校の卒業生の保護者がいたり、18年勤務している教員がいたりして、橋渡しをしてくれる地元出身者がいる。その方々を通して人々の声を聞くことができる。こちらから聞かなくても、地域の声が聞ける。これもこれまでの活動の賜物。

Q 商品開発、販売の収入はどのように活用しているのか。

A 道の駅等で開発した大福やマーマレードを売っているが、その売り上げの一部を寄付していただき、生徒の探究活動費として活用している。

### <全体を通しての意見、感想等>

つながりと居場所づくりがキーワードになっている。子どもの居場所づくりで大人の居場所、つながりができる。地域とのつながりが防災にも生かされる。小規模には大規模にはないフットワークの軽さがある。

思いがあって活動がつながっていくことを感じた。

三崎高校のすばらしさをこれからも知ってもらえたらうれしい。

他の活動を知ることができて、勉強になった。自分の活動にも生かしていきたい。

未来があることを改めて感じた。子どもたちはこれからの時代を切り拓いていく。いろいろな

ことを乗り越えていける力を付けてほしい。

地域に着目すると違った気付きがあることを知れてよかった。自分の活動にも取り入れていきたい。

子どもの意見を取り入れてまとめることと、大人が考えていかないといけないことがあり、大変さを感じていたが、発表を聞いて、前向きな気持ちになることができた。子どもたちを地域で見守ることが子どもの成長につながり、後々に地域を支えてくれる存在になってくれることを感じることができた。

地域の活気に気付かされた。学校も地域を頼っていかないといけないし、学校からも地域に歩み寄っていかないといけないと感じた。

幼いときに地域の方と得た絆を地域に還元したいという思いが温かいと思った。

# 第 14 分散会

ファシリテーター 小池 源規  
分散会記録者 桑野 紗依

## 第 20 回おのみち 100km 徒歩の旅

### ～ おの 100 挑戦隊 『感動創造の旅』 ～

NPO おのみち寺子屋 発表者 西川 峻・奥野 愛絵・今村 美雨

広島県尾道市で、地域(まち)を構成する市民一人ひとりにスポットを当て、魅力ある人間を創造することで、まちに貢献することを理念に活動をしている。

「おのみち 100km 徒歩の旅」(以後は“おの 100”と表記)は、小学 4 年生から 6 年生までの小学生が 4 泊 5 日をかけて尾道市内を 100km 歩き抜く事業である。

本事業は平成 15 年に始まり、新型コロナウイルスの影響で 2020 年度、2021 年度は事業内容を変更して行った。20 回目の本年はスタンダードの“おの 100”を開催することができた。

“おの 100”に参加した子供たちからは、達成感や感動、自分もボランティアとして活動したいという声、保護者からは、次年度も参加させたいという期待の声があがっている。また、“おの 100”では地域とのかかわりを大切にしており、ルート上にある銀の道の整備を行ったり、ポスターやチラシで声援依頼を行ったりしている。

事業継続にあたっては、コロナ禍で新規メンバーの獲得の難しさや、中止した 2 年間の空白を埋める難しさがあるが、今後は、逆境とも共生して活動できるという希望の光を灯すことができたので、自分たちにしかできない経験を活かして、さまざまなことに前向きに取り組んでいく。



# 国際子ども食堂

特定非営利活動法人松山さかのうえ日本語学校 発表者 山瀬 麻里絵

愛媛県松山市を中心に、多文化共生につながる外国人支援に関する事業を展開している。主には、外国人が地域の子どもたちに母国の料理を振る舞う「国際子ども食堂」を毎週水曜日及び第 2 土曜日に開催しており、外国人や日本人の高校生・大学生による学生ボランティア、子どもたちが食事を共にしている。2021年3月にオープンしてからすでに100回の開催を超えており、毎回60～80食を作っている。

そのほかの外国人支援の事業としては、日本語教育や防災教育、病院同行、技能実習生向けのフードバンク事業も展開している。それらに加えて、外国人支援だけでなく、県内外の大学や高校で外国人支援に関する講義なども提供している。運営には、留学生のほか地元の高校生や大学生が携わることで、将来のグローバルリーダーの育成にも尽力しているのが特徴である。

これらの活動を通して、外国人が尊厳を保ち続けられる社会や外国人が活動できる場所を作っていくことを考えている。



## 【質疑応答】

< NPO おのみち寺子屋 >

Q 団体の学生の人数や登録者は何人いるのか。

A 団体には会員として社会人が100名余りいるが、学生はいない。学生は毎年受講生として募集され、今年は高校生含め59名が登録して活動している。

Q “おの100”に参加できる対象の子どもは。

A 保護者が5つの公式行事に出席できれば、全国どこからでも参加できる。以前にはシンガポールから参加した子供がいる。

Q 募集はどうかけるのか。

A 尾道市内の小学校に該当児童数分のチラシと申込書を持参する。また、近隣の市町には学校宛にチラシと申込書を送付する。

Q “おの100”の活動にほかの人(地域の人など)は協力するのか。

A 基本的に、会員の社会人スタッフと学生スタッフが運営する。ただ、事前準備では、消防士から救命

講習を受講したり、整体師からテーピング指導を受けたり、本番では、地域の和太鼓活動している人をはじめ、さまざまな方が協力する。

Q 寺子屋のスタッフと“おの100”のスタッフは同じか。

A 学習支援の“寺子屋おのみち”は“おの100”の学生スタッフで希望する者がサポートしている。

Q “おの100”の対象学年は。

A 小学4・5・6年生。

Q 人数は。

A 例年定員100人の小学生を募集しているが、今年はコロナの関係で50人を募集し、46名が参加した。定員を超えれば、抽選になる。

Q コロナの中での学生生活、人生の節目の時にコロナで会えないときだったと思うが、それでも参加しようとした理由は、今後活かしていきたいということだ。

A 大学に入って勉強だけではつまらない。大学の同好会に入口があって、なにかやってみたいという思いがあって始めた。学生主体であることから、主体性が身についた。

A いろいろな学部の人とつながりたい。将来に生きる環境づくり、支援など。100kmの中で不自由な体験（敢えての不自由体験）環境から子どもたちへのアプローチについて考えることだ。

A 大学の中で活気づいていた。子どもたちと活動したい。大学生という時間の中で体験の大切さを実感した。人とのかかわりが一番大切だと感じた。

感 大人も子供も先生も体験不足だ。工夫の仕方を学生時代に学ぶのは良いことなので、教職にもいかして、経験をいかせる現場づくりをしてほしい。

#### < 特定非営利法人さかのうえ日本語学校 >

Q 留学生はアルバイトかボランティアか。

A 有償ボランティア。事業は助成金からで、在留資格のルールに則り、支払いができる人だけに払っている。

Q 高校生、大学生の募集方法は。

A 主にインスタ、学生人事部。ガイダンスなどをしてくれる。

Q さかのうえ、国際子ども食堂、混ざっている気がするが違いはあるのか。

A 子ども食堂と国際子ども食堂がある感じで、さかのうえ子ども食堂＝国際子ども食堂という感じだ。

Q フードパントリーのようなことはしないのか。輸入食品みたいなものが残っているが不要ないからか。

Q やっている。フードパントリーには頼らなくても助成金でまかなえる。

Q 外国人がシェフというが、料理の専門性はあるのか。栄養面のバランスとかは。

A 国費留学で来ている留学生が多い。専門性はないが、看護師さんや調理師さんが衛生や健康の面で管理してくれる。バイキングだから栄養はどうしても偏ってしまう。

Q 学校で指導してもバイキングだと同じようなことがある。また、異文化の食事ということで合う、合わないとかはないのか。

A ある。しかし、世の中には合う、合わないがあるのを知るきっかけにもなる。

# 第 15 分散会

ファシリテーター 田邊 裕貴  
分散会記録者 濱口 愛美花

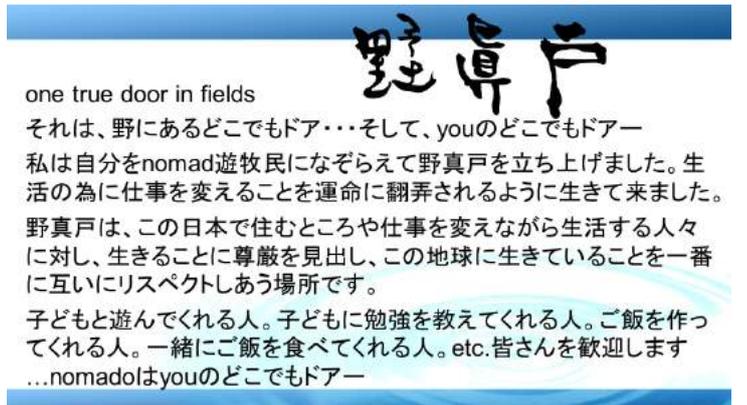
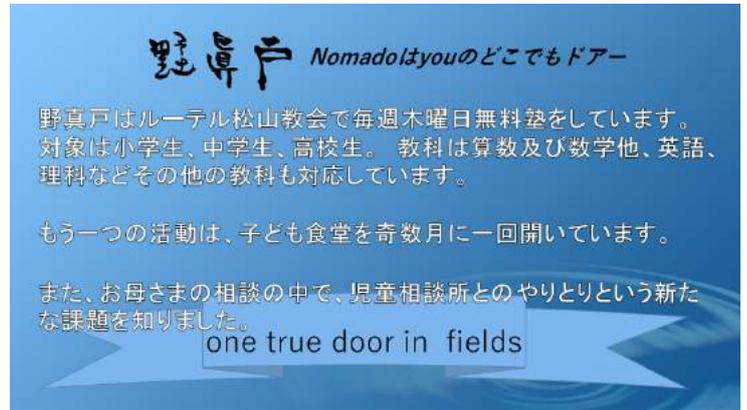
## NPO 野真戸

発表者 栗田 三恵子

野真戸は、2022年5月に発足した団体で、小学生から高校生を対象にした、無料塾と、子どもから地域のお年寄りみんなに来てもらえる子ども食堂を運営している。野真戸の文字には、「野にある真実の扉」という意味がこめられ、ノマドは you(あなた)のどこでもドアをキャッチフレーズとしている。

学習に支援を要する子どもに、その子どもの状況、環境、レベルに合う学習支援をすることで、自信を取り戻し、学校や勉強が楽しくなってもらうことを目的としている。

敢えて無料にこだわるのは、無料を掲げなければ出会えないであろう子どもたちとの出会いを求めているからである。



## えひめ農業遺産でなんかしようや！の会

発表者 矢野 諭稔

本プロジェクトは、愛媛・南予の柑橘農業システムの世界農業遺産認定を目指す有志メンバーによって運営されている。主な目的は、愛媛の柑橘農業の現場に足を運び、遺産を未来に継承するための糸口を探ることである。2022年4月～5月の伊方町と八幡浜市の柑橘園地の訪問では、地域が抱える課題として、柑橘農家の後継者不足の問題や、柑橘栽培が生物多様性に与える影響について学んだ。この学びから、「農業遺産×生物多様性」と「農業遺産×若者」というトピッ



クでディスカッション・セミナーを行い、地域課題の解決に向けた取り組みを行っている。

### 03) 活動事例



#### 事例3選!!!

##### ◎みかんの現場をめぐる

- ①農業遺産×対話：柑橘農業の現場を知る（八幡浜市&伊方町）
- ②農業遺産×生物多様性：有機栽培・省農薬について考える（明浜町）
- ③農業遺産×後継者：個性溢れる若手グループと語り合う（明浜町）



Copyright ©2022 えひめ農業遺産でなんかしょうや！の会

## 【質疑応答】

<野真戸>

Q 勉強を教える中で、子どもたちに何を感じてほしいのか。

A 今の子どもたちは成績で存在を価値付けられているような気がする。そして、自己肯定感が低い。そのため、前向きに生きる力や、社会に出たら成績なんて関係ないのだということを知ってほしい。自己評価が低くならない授業を目指したい。

Q 何人くらい参加しているのか。

A 中学生が数名で、継続しているのは2人である。小学生～高校生を対象としているため、小学生にももっときてほしいと思っている。まだまだ規模は小さい。

感 少人数で学習支援を進められていることが素晴らしい。

感 子どもがたくさん来るからいい活動ではないと思う。栗田さんという人の魅力に引かれて来る子どもたちだけでもいい。手広くなくていい。生きる力を教えてくれる人がこうやっていてくれることは大切なことだ。

Q どのようにして人を集めているのか。

A 子ども食堂にチラシを置いて集めている。また、口コミでも広めている。

Q スタッフはいるのか。

A 必ず来てくれる人がいる。校長先生をしていた人や愛大の学生、社会人教育の経験はないが、関わりたいと思って来てくれる人がいる。

Q 関わって子どもの力になれたと思えたことはないか。

A まだはっきりと言えないが、講師をしたい人が多いことに驚いた。野真戸は、進学塾ではなく、勉強が楽しいと思ってもらえるように教える場所なので、「これなら教えられるよ」という人にも来てほしい。資格がなくてもいい。子どもが好きで、教えたいという人に来てほしい。いろいろな人が携わる塾にしたい。

Q 無料の塾や子ども食堂は、どのように経営されているのか。

A 賛同者に寄付をいただいたり、食材は提供していただいたりしている。今後は、松山市の補助金をいただこうと思っている。

感 松山では、子ども食堂が普及している。フードバンク、教会など食材を確保してくれていると

ころがあったり、バックアップしてくれたりする所がある。

Q 教会でしているのは少し敷居が高い。他の場所での活動は考えていないのか。

A 公的な場所は制限が多い。のぼり旗が立てられない。

感 公民館や自宅など、落ち着く場で活動できるといいとも思う。

感 堅苦しい場所ではなく、だれかと関わることに安心が持てる場所になっていることが素晴らしい。

感 野真戸は、子どもがほっとする場所。サードプレイスとして機能している。しかも無料というのも魅力的である。ぜひ続けていって欲しい。

#### <愛媛農業遺産でなんかしようや！の会>

Q どんな活動をしているのか？

A 世界農業遺産認定に向けた取り組みの中で、高校生や大学生が農家の人に関われるような場を作り、提供している。普段何気なく食べているみかんだが、生産者と関わることで私たちの考え方が大きく変わっていくことを実感している。今後は、みかん以外にも様々な農産物にも目を向けた取り組みをしたい。

Q 日頃からしている取り組みなどを詳しく知りたい。

A この活動を始めて、スーパーに行くと、どこの産地か気にするようになっていく。出会いの中で、誰が作っているか気にするようになった。

感 行政や一般の人が興味を持って活動してくれることで継続していく活動だと思う。柑橘農家だけでなく、ジャムを作る人や、養蜂に携わる人も関係してくるので、いろいろな人たちを巻き込んでいって欲しい。

Q 若者が農業に興味を持つために、どんな活動をされていますか。

A 子どもたちに、どうすれば農業に携わることができるかを教えたいと思っている。農家になるまでのプロセスなど、将来農業をしてみたいと思ってもらえるようにアピールしている。

Q 進路は Web マーケティングに進んでいるが、後継者になろうとは思わなかったのか。

A 就活時点では今の進路に進んだ。しかし、もともと愛媛に住みたいという気持ちがあった。

感 この事業は愛媛県全体が取り組んでいる事業である。地元に住んでいても知らない人は多い。いろいろな人が携わってくれている事業なので、様々なジャンルの人を各自治体に取り入れて、将来的に愛媛の農業をよくしていって欲しい。

感 楽しい活動が、消費者に農業をしてみたいと思わせるためのアピールになっている。

感 Web の世界でも広めていってくれる人がいるのは大事なことだ。

感 世界遺産を取ることをゴールにせず、取れた後はどうしていくのかを見据えておくと、継続していくのではないかと思う。

**<全体意見感想等>**

- どちらも規模も領域も違うが、子どもたちや若者を対象としており、次の世代につなげているところが素晴らしい。
- どちらも事業者だけでなく、専門家、学生や一般の方など、様々な人が携わって支えられている。
- 長く続けていって欲しい。

# 全体会

特定非営利活動法人ひとつむぎ  
よみがえれ！亀ヶ池温泉プロジェクト

鳴門教育大学大学院 1 年 岸 壮真  
愛媛大学 4 回生 浅野 さやか  
阿部 眞子

## 特定非営利活動法人ひとつむぎ

岸：私は、なにわ男子大好きな学生。将来は高校理科の教員希望である。3 年ほど、この団体で活動している。

特定非営利活動法人ひとつむぎは、徳島県牟岐市を拠点に大学生が運営する町づくりや教育支援をする団体。

地方創生を目指し、人と人を紡いでいる。主な活動としては、行政と連携して、社会教育のプログラムを企画運営している。

徳島県出身の大学生で構成。大学はばらばら。県外の人も何人かいる。中学生、高校生もときには参加する。

牟岐町は、徳島市から 62Km 離れたところ。沖合にぼっかり浮かぶ 3 つの島があり、東に紀州、西に室戸、南に太平洋、北に四国山地の大パノラマが開けている出羽島や大島・津島では、海中公園があり、千年サンゴなど、自然のある人の優しいところである。近年、人口の減少、高校がないため中学校を卒業すると子どもたちは町外へ行く、さらに、南海トラフがくると、なくなってしまうという懸念がある。

ここでは牟岐町の中学生を対象としたシラタマ活動と徳島県の高校生や大学生を主な対象とした青少年講座を紹介する。

シラタマ活動は、中学生の主体性と郷土愛を育むため、地域の大人を巻き込みながら活動を進めている。大学生は、中学生をサポートする。中学生と大学生がつながることで、全く違う場所から来る大学生にも相談しやすくなる。また、大学生と地域住民がつながることで、地域を一つにすることができる。

例年、12 月から翌 8 月にかけて行われる活動で、月に 1 回程度活動を行っているが、コロナウイルスの影響により、県外大学生の参加が難しい。12 月ぐらいから、集まりながらいろいろな方向で作り上げていきたいと思っている。作り上げた内容を地域の人に報告する。昨年度は、SDGs をテーマに町の中の古い納屋を改装した。今年度は、夏休みに短期集中で、グループワークや農業体験等を計画していたが、徳島県での新型コロナウイルスの感染拡大に伴い実施できなかった。



また、徳島県青少年講座では、高校生・大学生を対象に、ゲストを呼んで講演していただき、みんなで考える機会を設けることにしている。来年は1、3月に開催予定。

沖縄への修学旅行が中止となったため、昨年度は牟岐中学校でオンラインの授業を開催した。今年は、広島への修学旅行が決まったため、原爆をテーマに、広島の語り部から話を聞き、授業を作り上げていく。県外大学生はオンラインでつながりながら、県内の大学生数名は対面入りハイブリッド形式で行った。

今年の7月、パネル展をする。町外に行った子どもたちが戻ってこられる場所としてローカルハイスクールを実施してきた。今後も、この活動を続けていきたい。

しかし、現状としては、牟岐町に入り込んでいくことが難しくなっている。こちらがやりたいことと、町の意向が違う。そこで、コロナ禍の新たな活動として、徳島市内と牟岐町等をオンラインでつないでの活動も行った。学校教育が優先される状態、青少年活動や保護者の不安など、対面できたらと思うができない。培ってきた経験が次につなげることができない。行動力、思考力のある人たちとの出会いやきっかけ、対面で活動してきたOBの人の思いもある。もっともっと、自分たちにできることを模索しながら地域で活動を続けたいと思う。

ここからはひとつむぎの大学生の想いや実態について。京都在住の大学生は、牟岐にはなかなか行けない。それでも、オンラインでつながって、平和学習のリーダーとして活動に参加してくれた。沖縄、広島、知らないことを学ぶことができた感想を伝えてくれた。シラタマ活動1期生で、現在情報工学を専攻する学生は、ホームページやオンラインなどの技術面でサポートしてくれている。今年度ひとつむぎに加入した大学1年生は、中高生の時シラタマ活動や他の事業に参加して大学生から多くのことを学んだため、大学生となった今、自分も同じように頑張りたいという思いをもってくれている。また、別の大学生はシラタマ活動で、中学生と大学生の活動をみて、心地よかったため継続して活動に参加していると言っていた。自分の楽しいを広げていきたいという思いもある。上回生として後輩らのモチベーションをあげることができるように思う。このようにそれぞれの学生ができること・得意なことを活かして、また、様々な想いをもって活動に参加してくれている。

## よみがえれ！亀ヶ池温泉プロジェクト

浅野： 私は、佐田岬半島に位置する伊方町の、三崎高等学校の出身。地域活性化活動のご縁で、この会にも高校生のころから参加している。

阿部： 私も伊方町出身で、浅野さんのお父様である浅野先生には中学校のときからお世話になっている。

阿部： よみがえれ！亀ヶ池温泉プロジェクトは、伊方町×伊方町にゆかりのある大学生×高校生の地域活性化プロジェクトの一つ。亀ヶ池温泉は大洲から車で4、50分、佐田岬メロディアイ



ンから宇和海に下りた閑静なエリアにあるスポットで自然豊かなところ。落雷火災の起きる前は、14年間で24億円の利益、伊方町の人数の19倍の人が訪れている。昨年、火災。午前2時、温泉施設の半分が焼ける。今年1月、役場の人と一緒に被害状況を撮影した。地元のシンボルがなくなったことに悲しい思いをした。何かできないか考えた。

浅野： まず、仲間を集めた。伊方町出身の大学生や愛媛大学の先生方の力をお借りし、プロジェクトを発足させた。また、愛媛大学のダンス部と、三崎高等学校の学生につながりがあったので、高校生に、よりよい亀ヶ池温泉の未来を考えてもらった。2月3日、ワークショップをオンラインで開催した。大学生は自宅から、三崎高校の生徒は学校から参加し、そのほかにも伊方町の役場の方や設計事務所の方にも参加してもらった。3つのグループに分かれて、新しい亀ヶ池温泉にどのようなものがあればいいか、意見を出し合った。

それぞれのグループで話し合うと、高校生の自由な発想でおどろくことが多かった。インスタ、SNS、交通手段を充実させる。みかん風呂とかジュース風呂、リースペースの充実。自由な意見から、精査し、具体的なプランを、大学生（浅野と阿部）が再建検討委員会で提案した。

阿部： 再建検討委員会で高校生が考えた素敵なアイデアを発表。また、再建支援についてのお話も聞いた。新しい施設の設計業務についても説明していただいた。

提案したアイデアの1つ目は、セルフ写真館の開設。セルフ写真館では訪れた人が好きなタイミングで写真を撮り、お客さんが撮った写真を自分のSNSにアップすることで自然と宣伝に繋がり、コストをかけずに宣伝を行うことができる。2つ目のアイデアは、亀ヶ池温泉オリジナル浴衣を作成するため、浴衣コンテストを開催すること。3つ目のアイデアは、柑橘を収穫して、施設の受付に持って行くと、ポイントがもらえ、その場で絞って柑橘ジュース体験もできるようにすること。この体験を実施するためには、地元の農家さんをお願いする必要があるだろう。伊方町の地域資源を活用して亀ヶ池温泉の復興につなげたい。

4つ目のアイデアは、リースペース機能の充実。ワークスペースを設け、お年寄り、子育て世代等の人たちが気楽に利用できるよう充実させたい。そして、5つ目のアイデアとして、グランピングでの宿泊を提案した。ドーム型テントで、自然の中で宿泊し、手ぶらで行ってキャンプ、バーベキューが楽しめる。

令和6年春、すべての施設が整い、本格的に開業する予定。若者だからこそ気づけること。若者の自由な発想を生かして地域活性化につなげていきたい。

今回、地域の人の温かさや役場の方々が、とても親身になってくれた。恵まれている環境に、感謝したい。自分たちの町を自分たちがつくっていくという、当事者意識が高まったように思う。よりよい亀ヶ池温泉に力を尽くしたい。

大学生が中学生とかかわることでよかったこと

岸： 最初は話をしてくれなかったが、3回くらい会うと、いろいろ話してくれるようになった。中学生

の変化を間近に見ることができて嬉しかった。人見知りでなかなか話せなかったが、中学生とかかわることで、自分から周りの人とかかわることができるようになった。勉強になったと思う。

何が、今の活動に結びついているか。

浅野： 人とのつながり、楽しいと思えることが原動力。三崎高等学校からの付き合いの地域の方とは、今でもつながっている。自分のコミュニティの中で、自由な価値観に出会えること。

阿部： 地域と学校の架け橋になりたい。それを達成するためにこれからも地域に積極的にかかわっていきたい。地域の少子高齢化が進む中、地元に残りたいと思う子ども、県外へ行っても地域行事の際に戻ってくれる人材が、一人でも増えればいいと思っている。

## おでん café

### お題「全体会を聴いてどう思ったか」

回し人 舟田 美加

舟田： 2年間の休みを経てやっと再開することができた。おでんはいろいろな具が入って美味くなる。ぐつぐつ煮る中で、さらに美味しくなってほしい。

6、7人のグループができています。話し合いの後、あらかじめ決まっているホストを一人残して、他のメンバーは移動する。この作業を2ラウンド行って、思いの共有をする。最後は、最初のグループに戻り、旅に出たの収穫を語り合う。

最初は自己紹介「おでんの中で一番好きな具」15秒 合い言葉はブラボー！

全体会を聴いてどう思ったか。模造紙に書き込んだものに対して共有する。



## 全体でのシェア

- L : 若者力の活用、若者がハブになって繋がっているのが魅力。危機感を持って学生が活躍。よそ者が地元民であり、よそものであり、牟岐町の地域をつかまえているのがすばらしい。共感力の高さに驚く。子どもは、頑張る大人をみて育つ。デジタルとアナログ、つながっていけばいい。
- S : 郷土愛を持つ。そのためには、地域にいかにか大切にされてきたか。子どもの頃の体験が必要。楽しそうな活動。自分たちが地域から必要とされているか。それが、郷土愛につながる。考えるよりまずはやってみる。
- C : 高校生、大学生、信頼して任せられる大人、恩返しではなく恩送り。出会いの大切さ、受ける、与えられる幸せを感じた。
- J : 郷土愛、地域への愛情、学生の楽しんでいる姿、自分たちのアイデア、新鮮な空気を送り込んでくれる。大人はどうするか、どうあるべきか、本気をださないと、ちゃんと声を受け止めることができる大人に。楽しみながら少しずつ。
- 舟田 : 「若者」「よそ者」「目がきらきら」キーワードがたくさんあった。集まりを通して、新たな気づき、再発見があったと思う。かわりを、そしてつながりを意識してそれぞれのフィールドでがんばってほしい。旅をしていい味が出た。それぞれのおでん鍋の中に入れてほしい。

